

## ゲルトルート児童教育法の考察

〈民衆の自己解放の真の学力を求めて〉

黒澤英典

### はじめに

この書は、ペスタロッチーの生涯の全著作のうちで最も重要な教育学的著作である。この書によって、教育思想家・教育実践家としてのペスタロッチーの名声は初めて確立したといつてよい。ヘルバルト (J. F. Herbart: 1776-1841) もフレーベル (F. W. A. Fröbel: 1782-1852) もこの書によって初めて教育思想家としてのペスタロッチーを評価したことは明らかである。彼らはペスタロッチーがこの書において示した教授理論や、その後の実践に学び、これと対決しながら、彼ら自身の教育思想や教授理論を形成していったのである。その意味で本書『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』わが子を自らの手で教育しようとする母親たちへの手引書・・・手紙による『試み』『Wie Gertrud ihre Kinder lehrt. ein Versuch den Müttern Anleitung zu geben. ihre Kinder

selbst zu untrücheln. in Briefen.” (『ゲルトルート児童教育法』(以下『ゲルトルート』と省略)は、やはり近代の教育思想、とくに科学的な教育理論の成立史の上で記念すべきモニュメントであるといわなければならないであろう。)

しかし、それ以上にペスタロッチーが、この書簡で最も言いたかったことは、後に『わが生涯の運命』(“Meine Lebensschicksale als Versteher meiner Erziehungsinstitute in Burgdorf und Herten”, 1826)のなかでも言っているように、「民衆教育の単純化」「民衆の自己解放のための生きる力」としての学びであった。また、『シユタンツ便り』(“Pestalozzi's Brief an einen Freund über seinen Aufenthalt in Stanz”, 1799)のなかでも、その萌芽をみることができる。彼の最大の課題は、最下層の子どもたちや戦争で親や家を失った孤児たちが、いかにしたら「学ぶ」ことに、興味・関心を抱き得るかの探究であった。

この子どもたちが学ぶことによって、それぞれの子どもたちの潜在的可能性を開花させ、自己解放の学力を身につけることによって、近代社会を担う民衆の育成を目指す近代教育の実現をめざしての一四通の書簡である。

### 1.1.1の書簡の歴史的評価

この書簡に示されたペスタロッチーの教育思想や教授理論は、ノイホーフ (Neuhof) での体験や『隠者の夕暮』(“Die Abendstunde eines Einsiedlers”, 1780) 以来の生活圏の思想やきびしい政治批判の姿勢が本書を根底において支えていることは明らかである。

ペスタロッチーが新しい教授理論を開拓したというのは、具体的には彼が当時支配的であったザルツマン (C. G. Salzmann, 1744~1811) などによる教育内容および方法の合理化など大胆に主張し、実践した汎愛派的教授理論や

教授法に対する不信であった。それに代わる直観教授を提唱したことを意味している。<sup>(2)</sup>

さらに、この新しい教授方法の開発が、学びからとうざけられ虐げられていた民衆の不幸な生活に触発されたものであったということを忘れてはならない。

当時一八世紀の社会は輝かしい啓蒙時代で新知識の普及によって上流階級の人々は華やかな生活をしてきた。しかし、民衆は決して幸福になっていないという認識と、多くの民衆は学びから疎外されている現実に対して、この不幸にあえいでいる民衆のために、彼らの不幸の源泉をつきとめ、民衆に学びを通して生きる希望と力を育みたいというベスタロッチー特有の正義感から民衆の向上のための知育論ないし、学力論についての新しい理論を開発に向かわせたのである。この事実はベスタロッチーの教授理論を歴史的に評価する場合決して忘れてはならないことである。

君主や国王に、より忠実に奉仕するための知識とか、産業社会の要求に効果的に応ずるための学力とかいうようなものではなく、民衆が自らの力で幸福になりうるような知識や学力をベスタロッチーは求めたのであった。

時代は啓蒙の世紀であり、社会は産業革命の前夜であった。スイスの純朴な山村まで商品経済の浸透にともなって民衆の生活は急激に変化した。

この生活の急激な変化に対処するために民衆は新しい知識、新しい学力を必要としていたのであった。ところがそれを学びたくとも学び得ないのが、当時の民衆のおかれている実状であり、それを学び得たとしてもそれは不毛の知識の断片でしかなかった。これでは民衆は幸福になれない。この危機的な事態の認識が、ベスタロッチーを新しい知識観、学力観の探究へと立ち向かわせたのである。『ゲルトルート』は、その探究の成果であると言ってよい。それゆえ、この書は、存命中のベスタロッチーの存在を有名にし、当時においてすでに重要な文献であっただ

けでなく、二一世紀の今日においても、将来においても、子ども愛し子どももの健やかな成長を願う人々にとって、さらに虐げられている民衆の自己解放の眞の学力を求めようと願う人々にとつての永遠の教育書であろう。

第二次世界大戦後ドイツにおいてペスタロッチー研究の新しい領域を切り拓いたケーテ・シルバー (Kate Silber)<sup>(3)</sup> は、その主著『ペスタロッチー』(“Pestalozzi, Der Mensch und sein Werk” 1959) のなかで、『ゲルトルトはいかにその子を教えるか』について、冒頭この書の教育学的意義を次のように述べている。

「同時代の人々がある作品について下す評価は、しばしば後世の人々の評価とはひどく異なるものである。『探究』は今日ではますます重要さを増しているが、それが出版された当時から一九世紀の終わりまでは、ほとんど注目されなかった。むしろ存命中のペスタロッチーの名声は、『ゲルトルトはいかにしてその子を教えるか』(1801年) という書物にもとづいていた。なぜならこの書は、幼児期の教育の領域において根本的に新しいものを含んでいたからである。すなわちそれは、すべての人間の精神活動が《私自身から (von mir selbst)》<sup>(4)</sup> 出発する、という『探究』における《巨匠の眞理 (Meisterwahrheit)》を教育学的に拡張したものであった。……すなわち「私が現にある一切、私が欲する一切ならびに、私がなすべき一切は、私自身から出発する。この発見を教授法に応用することは、学校教育におけるコペルニックス的な方向転換を意味した。……本書のなかで提起された本質的な諸原則は、教育学の歴史に極めて深い影響をおよぼしたのである。」<sup>(4)</sup> 教育におけるコペルニックス的転換とは、学習者主体・子ども中心の教育を提唱しているのである。やがて、二〇世紀の子ども中心主義の教育思潮の源流となるのである。

## 二、一四通の書簡の構成

この書は、親友ゲスナーに宛てた一四通の書簡なら成っている。刊行は一八〇一年一〇月、悲嘆のうちにシユタンス (Stans) を去つてブルグドルフ (Bruggdorf) に移つてから二年余の歳月が流れた。新しい土地で元気を取り戻したペスタロッチーは、五五歳の働き盛りであり、民衆教育へ情熱が次第に高揚してきた。

ペスタロッチーが、一七九九年に初めてブルグドルフで学校を開いた建物が今も残っている。下町の一角に、今はかなり老朽した建物になったが、町の人々はペスタロッチー・ハウス (Pestalozzhaus) と呼んでいる。<sup>(5)</sup> その建物の外壁にある記念額には、次のような言葉が刻んである。

この家でハインリツツヒ・ペスタロッチーが一七九九年に初めて公教育に携わった。

「私は私の古い日々にもまず底辺の人々に奉仕することができたことを、私の人生の王冠だと思っている。」

この額は一九二四年に、ペスタロッチーの偉業をたたえるブルグドルフ市民によつて掲げられた。ここでシユタンス以来の新教授法の実験がようやく成果を挙げ、これを本格的に実施する新学校や、これを普及するための教員養成所の開設を目前にしていたからである。

そして、この新学校がよりどころとするところの教授原理を広く人々に広めることも、またペスタロッチーの長の希望である下層民の人間の解放のために是非とも必要なことであつた。

ともあれ、ペスタロッチーは「いまこそ民衆教育についての君の理念を公表しなさい」というゲスナーの勧めに

応えて筆をとったのである。

この書は、彼自身の内面からわきでる言葉によつて語られた彼自身の思想である。この書を見るとわれわれは、彼の《内的直観》の充実に心を奪われるのである。だから、この書は近代国民教育の礎石であり、永久に学びによる民衆解放の民衆教育のバイブルであると言える。

この書の構成は、次のようになってゐる。

第一・第二・第三の書簡……序論、回想と協力者の紹介

第一の書簡では、ペスタロッチーは、ノイホーフ以来シユタンツを経てとブルグドルフに至るまでの生活と思想の遍歴を、彼の「メトード（教育法）」の発生と発展の由来として説明している。貧しい子どもたちを教育し、それを通して国民を救済したいという意欲とそのための苦闘が「メトード」に結実したと言える。そして彼の苦難に充ちた生活と思想の足跡を回想している。第二・第三の書簡では、彼がブルグドルフにおいて三人の助手たちの協力を得るに至つた過程と、それぞれの助手たちの特色が、感謝をこめて紹介されている。

第四・第五・第六の書簡……総論、知識の陶冶

ここでは、彼の教育の一般的な原理を説明している。当時の学校教育への鋭い批判の上に人間の自然的発達の法則にしたがい、「直観」を基礎として明瞭な概念へと、「数」「形」「語」の能力を介して進められる教授の方法としての「メトード」の説明である。

第七・第八の書簡……各論、知識の陶冶

ここでは、いわば各論として、上記の一般的な原理を教授の各部門に応用する試みが説明されている。つまり、「語」の教授、「形」の教授、「数」の教授の手續きが、「直観のイロハ」、単純で容易な初歩から出発して次第に対

象を正しく把握させる筋道として、具体的に例を挙げて説明しているのである。

第九・第一〇・第一一の書簡および第一二の書簡

ここでは、上記の自分の思想の特色をその歴史的意義について評価し、さらに反省を加えるものである。とくに直観を人間の認識の基礎として認めたこと、自然による人間形成の根本を発見したこと、教授活動の全体を「教」「形」「語」の三つの基本手段に還元して、さらにそれを調和的に組み立てることによって、人間の自然の歩みに一致する教授方法を工夫したことを強調している。さらに、残された課題を指摘して、民衆の不幸を救おうという大望を抱きながらも自分が無能であったことを自省し、これまでのことを助手たちの協力を得て成し遂げたことについて、神に感謝している。

第一三・第一四の書簡……道徳と宗教の教育の問題

ここでは、人間における神への愛、信頼、感謝、柔順などの心が、もっぱら自然の本性にしがって幼児と母親との関係から生ずることを指摘している。こうして、母の存在と過程と、そこで自然的に育つ感性的な諸力と心情、およびそれらがやがて真の理性と道徳性との基礎となると言うことを強調している。

以上のような構成になっているが、具体的にどう展開されているか、見ることにしたい。その前に参考まで、先にあげたケーテ・シルバー (Kate Silber 1902-1979) は、この書の構成について次のように述べている。

「この書は、友人の出版者ゲスナー (Gebner, Heinrich) にあてた一四通の書簡からなっている。ゲスナーはペスタロッチーの諒解なしに、『リンハルトとゲルトルート』になって、その表題を選んだが、これは内容に少しも一致していない。もともとその表題は、副題にあるように、『わが子を自分で教えようとする母親たちに手引きを与えようとする試み』と呼ばれるはずであった。しかし、この意図にも、その書物は一致していない。母のため

の手引きとしてはあまりにも難しすぎるのである。その散漫な叙述形式は整った構成からは程遠いものである。整った構成が見出され得るとすれば、次のような順序になるであろう。

すなわち、メトローデを発見するに至る過程と助手たちについての見解とに関する歴史的・伝記的な紹介（第一・三信）ののち、大多数の書簡（第四〇―一一信）は知育を取り扱い、一通の書簡（第一二信）のみは「体」育を、最後の二通の書簡（第一三―一四信）は道徳・宗教教育をとりあげている。

上記の主要部分（第四〇―一一信）では、メトローデの一般的な原則と教科へのそれらの適用とが述べられている。知的メトローデはここでさらに三つの細目、すなわち《語》《形》《数》の教授に分けられる（第七―八信）。

しかし、『ゲルトルト』は必ずしも「方法的」ではなく、著者の感情の爆発はしばしば彼の説明の過程を中断する。それゆえ彼の思想を再現するためには、もつと理解しやすい順序と、できるだけより現代的な表現法とが見い出されねばならない。」と述べている。

なぜ、ペスタロッチーが何に動かされて新しい教授法を展開するに至ったかを、見ておきたい。彼が当時の人々、彼らの教育、彼らの市民的な境遇を観察して、そこに皮相的なものの考え方、非効率な仕事、劣悪な社会関係を見出したことがわかる。ペスタロッチーは、無知と貧困と革命がそれらの欠陥にもとづくことを認めた。

こうした社会矛盾の害悪の原因を、彼はこれまでの《教育の指導》が、個人とそのより優れた本性に向けられる代わりに、群衆（die Masse der Menschen）とその《墮落》（Verderben）に向けられていた点にあるとみた。

なぜなら「文化」は、彼が『探究』のなかで詳しく述べているように、個人の《醇化》（手厚い教養で感化すること）によってのみ達成され得るからである。

ペスタロッチーの思想の展開は、論理的に秩序立った論述を求めることができない。彼は感激する心のほとばし



りのままに語り記述している。

この書は内容からみて、知識陶冶の方法論が本書の根幹であり、特色であって、その歴史的評価もこの部分の評価をめぐって争われている。この意味において本書は、コメニウス (Johann Amos Comenius 1592-1670) 以来の近代の教授理論のなかに位置づくものであり知的陶冶の完璧を期することによって道徳的・宗教的陶冶の充実を目指す立場に立つ著作であると言える。本書が、ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart 1776-1841) やフレーベル (Friedrich Wilhelm August Froebel 1782-1852) を経てデューイ (John Dewey 1859-1952) やメルシエンシュタイナー (Georg Kerschensteiner 1854-1932) やモンテッソリー (Maria Montessori 1870-1952) などに至る新教育運動史上のもっとも重要な先駆的モニュメントであるといえる。

とくに注目すべきことは、この書は感性、感情の陶冶の人間形成における絶対的な優先をはっきりと主張していることである。

「子どもにとつて最初の教授 (Unterricht) は、決して頭や理性の仕事ではなく、つねに感覚の仕事であり、情報の仕事です。つまり母の仕事であります」(第一三の書簡)

さらに最も注目すべきことは、この書に示されたペスタロッチーの教授理論 (Unterrichtstheorie) が、《学問を民衆の手の届くところに置き、民衆自身の力による民衆の真の解放をめざすもの》であったということを、われわれは深く心に刻まなければならない。

人間の生まれつきもつ潜在的な無限の可能性と、一人ひとりの人間のもつ能力の発達の基本的メカニズムを追求し、これに従う教授理論の構築に取り組んだペスタロッチーが、人間の能力の発達を妨げてきた社会的諸条件を見逃すことなく、これと対決することなしには、民衆の真の解放はあり得ないとした洞察の鋭さを現代に生きるわれ

われも学びたいと思う。彼は、第七の書簡のなかで次のように述べている。

「私は世間の人々に、技術 (Kunst) とか学問 (Wissenschaft) とかを教えようとしたのでもななければ、教えようとしているのでもありません。：私はそのようなものは知らないのです。：ただ私は、あらゆる技術やあらゆる学問の発端 (Anfangspunkt) の学習を民衆一般にとって、もっとやさしくすること、また国内の貧しい人々や無力な人々の、顧みられず、育てられもせず打ち捨てられてきた能力に、教育の技術を適用すること、つまり、人間らしい人間になるための道を拓くことを望んできた。」<sup>①</sup>

それでは、まず『一四の書簡』を第一の書簡からペスタロッチャー自身の印象的な言葉を通して考察しておきたい。

### 三、『ゲルトルート』の考察

この一四通の書簡の中で述べられている教育学的ないし教授学的部分では、彼は何よりもまず今までの国民教育の欠陥ないし罪悪を指摘し、かつそれを粉碎しようとする鋭い洞察力と逞しい意気とを示しているが、こうした息吹はもちろん全一四通の書簡に一貫している。ペスタロッチャーは、この書において何よりもまず国民教育の解放のために戦った。わたくしたちは、この一四通の書簡を通して古代ギリシャに伝統を持つ西洋教育史上の階級的特権を打破して、教育の門戸を広く国民一般に、下層階級に解放しようとするまったく近代的な、かつまた民主的な精神の逞しい息吹を感じることができる。

さて、一四通の書簡は、すべて親友のゲスナーに宛てたものである。彼の言わんとする民衆の陥っている不幸の源泉は、民衆の無知から生ずるもので、これを解決するには民衆の無知を教育によって克服することが大前提であ

ると、彼は考えてのことである。

— そのためには、民衆の子どもたちに教育をすることの必要性を強く感じていた。民衆教育の根本思想について述べ、大切なのは一般民衆の子どもたちへの教育をどうするかであった。

「ペスタロッチーの《民衆教授の単純化》を求めた衝動は、すでに萌芽としては非常に早いうちに抱いていた。『シュタンツ便り』のなかでもまだ十分に展開されていなかったが、今や彼は教育学的行為を真にソクラテス的な意味において、この書簡のなかで試みようとしているのである」と、シュプランガー (Edeard Spranger) <sup>(8)</sup> が指摘しているように、民衆の基礎陶冶をどのようにしたら自然の途に沿って分かりやすく教えられるか、その教授方法がペスタロッチーの焦眉の課題であった。

#### 第一の書簡↳回想その一、ノイホーフからブルグドルフまで

この一四通の書簡では、ペスタロッチーは何よりもまず、今までの民衆教育の欠陥ないし罪悪を鋭く指摘し、かつそれを粉碎しようとする鋭い洞察力と逞しい意気とを示している。この書の序論にあたる部分が、第一・二・三の書簡である。これらの書簡は、主としてノイホーフからブルグドルフまでの回想と、その間の協力者に対して、感謝の心をこめて紹介している。では書簡を見ることにしよう。

— 先ず最初に、この書の冒頭で、ペスタロッチーは新しい知識観・学力観の探究へと立ち向かう決意を明言している。

(二) ブルグドルフの庶民学校の創設

ベスタロッチーは、ブルグドルフで新年の挨拶を親友、ゲスナーに (Gebner, Heinrich) 次のような手紙を送っている。「民衆教育についての私の見解をできるだけはっきりと申し述べよう。ああ、思えば長い道のりだった。青年時代からずっと私の心は強い一筋の流れのように、ただひとつの目的に向かって脈打ってきた。私のまわりの民衆が陥っていた、あの不幸の源泉を塞ぎ止めると言う目的に向かっているのだ。」と、さらに「私は何年間も五〇人以上の乞食の子どもたちといっしょに暮らした。乏しいなかで私のパンを彼らと分かち合った。乞食に人間にふさわしい生き方をさせるにはどうしたらよいかを学ぶために、みずから乞食としての生活をしたのだ。この子どもたちに対する教育理想には、農業、工業そして商業が含まれていました。」<sup>9)</sup>

ベスタロッチーはこの子どもたちの自立のために農業、工業、商業の職業訓練をして、彼らを立派な専門的職業人として世に送りだすことを願っていた。

しかし、ベスタロッチーに細かいことを処理する能力や心構えとが欠けていたため、このベスタロッチーのノイホーフの計画は彼を支える部下もなく結局挫折してしまっただけだ。

彼は、自らの『ノイホーフの挫折』を、次のように回顧している。「私はこの試みを進めるためにはかり知れぬ努力のなかで、奥深い真理を学んだのだ。そして、この試みが正しいのだという私の確信は、この試みが挫折したときに、却って以前よりもまして高まったのだ。わたくしの心は、試みの失敗にもかかわらず、動揺する事なく、ひたすら同じ目的を目指して意気高らかなものがあった。そしてついに、民衆の不幸な生活のただ中に身をおいて、民衆の不幸と、その原因を、いよいよ深く知ったのだ。それも幸福な人々が、決して知り得なかつたような知り方で、それを知ったのだ。」<sup>10)</sup>

彼が心から愛し同情もした貧しい人々を救おうとする彼の生涯の願いは、第一の書簡から切々と述べられている。

ペスタロッチーが一七九九年にブルグドルフに開いた学校は、下町の一角に今はかなり老朽化した建物になって残っている。その建物の入り口の外壁には「私は私の古い日々にはまず底辺の人々に奉仕することが出来たことを、私の人生の王冠だと思っている」と書かれた額が掲げられている。この記念額は、ペスタロッチーへの感謝の意味をこめて一九二四年にブルグドルフ市民によって掲げられた。下層階層の子どもたちのための学校である。そのほかペスタロッチーのブルグドルフ滞在は一七九九―一八〇四年であったが、一八〇〇年にはこの城に師範学校を開設し、自ら校長を勤めた。

ブルグドルフとは文字通り「城の村(町)」という意味である。見方によっては小さな町が、城に押し潰されそうにも見える。この城の建設は一二世紀末ツェーリンゲン家によるものである。現在は歴史博物館(Schlossmuseum Burgdorf) になっている。<sup>1)</sup>

城は丘の上にあつて周辺をくまなく見渡すことができる。下町から坂道を登り詰めると、城の入り口の右側に前庭があり、そこにペスタロッチーの記念碑が刻まれている。エメン川を見下ろす眺めのよい前庭である。ベルン州の紋章を大きく描いた広大な壁の右下の隅に記念碑がある。記念碑には次のような言葉が刻んである。

ハインリッヒ・ペスタロッチー (1799-1804) 記念

一八八八年にブルグドルフ市が感謝をもつて奉獻。それはいままでも我々の中に神の言葉として語りかけてくる。汝のみに生きるなかれ、兄弟として生きよ。

『ゲルトルートはいかにその子を教えるか』より。一八〇一年

城の内部の博物館には、小さいがペスタロッチーの部屋もある。陳列してあるのは、授業中のペスタロッチーを描いた版画とその下のガラス箱の中には一八一九年に出版されたペスタロッチー全集、一八〇一年元旦の自筆の手紙、ノイホーフで子どもに使ったタオル等が収められている。

さて、人々が注目したのは、この新しい学校がいったいどんな原理に乗っ取り、どんな教授法で子どもを教えるのであるかということ、さらに学習効果をあげられるかということに向けられた。ペスタロッチーは、自らの教授法（メトード）の原理とその実際とを世界に向かつて明らかにする必要がある。そこで、彼は一八〇二年の暮れ、パリに滞在していた折りに彼の教授法について一論文の起草を約束していた。ブルグドルフに帰って、この要請に応じて一八〇三年一月にパリーの友人に送った論文が『メトードの本質と目的』(Wesen und Zweck der Methode)である。<sup>(12)</sup>

こうした時、親友のゲスナーから「いまこそ民衆教育についての君の考えを公表したまえ」と勧められた。

## (二) ノイホーフの挫折の回顧と貧民学校の失敗とその教訓

ペスタロッチーは過ぎ去った苦難に充ちた日々を回顧している。

「ああ、思えば長いことだった、青年時代からずっと私の心はあたかも激流のように、ただ一つの目的に向かつて脈打ってきた。私のまわりの民衆が陥っていたあの不幸の源泉をせき止めたいという目標をめざして……。」<sup>(13)</sup>

ここで彼が言っているのは、ノイホーフにおける貧民学校のことである。一七七七年から七八年にかけて、彼の

学校には三〇数名から多い時には八〇名にもほる子どもたちが收容されていた。

基礎学習の指導にあたる教師、織り方・紡ぎ方の教師、実技の指導者、農民などの協力者と共に、ペスタロッチ夫妻は懸命に努力した。悪い馬鈴薯は自分が食べ、できるだけ良いものを子どもたちに食べさせた。「私は何年間も五〇人以上の乞食の子どもと一緒に暮らした。乏しいなかで私のパンを子どもたちとわかちあった。乞食に人間にふさわしい生き方をさせるにはどうしたらよいかを学ぶために、みずから乞食としての生活をしたのだ<sup>(14)</sup>。」と、彼は当時を振り返って述べている。

彼のノイホーフの貧民学校の構想は、農業・工業・商業の三分野によって構成されていた。しかし、彼自身が反省しているように、これらの仕事について全くの素人であった。

破綻は、決してたんに経済的側面においてだけ見られたものではなかった。ペスタロッチは、多くの子どもたちやその親たちからさえも手ひどい仕打ちを受けた。

乞食生活に慣れた子どもたちは、働くことを嫌い、学園の粗食を嫌がった。乞食をしていた時にはもつとうまいものにありつけたと言うのである。子どもたちの「物乞い」によって暮らしていた親たちもまた、子どもをペスタロッチに奪われて不満であった。

親たちは、子どもたちに不満をおおりの学園からの脱走を勧めた。親たちのたてる根拠なき悪評が学園の支援者たちにも及び、ペスタロッチは、やがて物心ともに孤立することになった。こうして、一七八〇年希望に充ちて始まったノイホーフの学園の計画は、完全に挫折した。

しかし、彼はこの挫折から多くのことを学んだ。何よりも彼は民衆を知った。そして、民衆のあるがままの姿を知ることによって、ペスタロッチは自分の試みの正しさを知りその必要性を深く確信したのであった。これが彼

にとつては大きな収穫であった。

「私は失敗することによって、ますます私の目的の正しさを知りました。．．．私はこの計画を進めるためのはかり知れない努力のなかで、底知れぬ真理を学んだのだ。この挫折によって、この計画は正しいのだと言う確信をますます持つに至ったのだ。．．．そして不幸な生活の真つただ中に身をおいて、私は民衆の不幸とその原因とを、いよいよ深く知つたのだ。」<sup>(15)</sup>

さらに、ペスタロッチーは、当時民衆の置かれている状況を次のように回顧している。

「私はまわりの民衆を誰ひとりとして知らなかつたが、次第に民衆の真の姿を知ることが出来るようになった。彼らが木綿織物で多くの収益を得て挙げる喜びの声、だんだんと金持ちになり、新しい家を新築し、彼らの豪華な収益などに私はだまされなかつた。また、民衆学校の教師たちが、ソクラテスのやつたような産婆術を試みているとか、村役人の子どもたちや、床屋仲間たちが読書会を開いているとかと言う話を聞かされても、そんなことには決してだまされはしなかつた。」<sup>(16)</sup>

ペスタロッチーは、こうして当時の民衆生活のみせかけの繁栄や、民衆の暮らしのなかのみせかけの啓蒙の姿には、決してだまされなかつた。そして、ペスタロッチーにとつて明らかなのは、このみせかけの繁栄や軽薄な啓蒙のもとにおいて民衆は決して幸福になつていないという事実であつた。こうした事実を気づけば気づくほど、彼は自身の無力さを感じ得なかつた。

ところで、当時ヨーロッパ世界を激動させたフランス革命に対してペスタロッチーは、あくまで冷静に、しかも深い洞察心をこめて見守つていた。革命の動向は、彼自らの正義感や真理感には違和感を感じながらも、しかし自ら求める理想の幻滅に耐えかねて、旧体制の崩壊による新たな人権思想の台頭に期待を寄せるのであつた。



(三) シュタントツの孤児院の回想

シュタントツの孤児院へのペスタロッチーの赴任は、決して容易に決まったわけではない。孤児院の設置場所にしても地元との混乱があった。結局最終的にペスタロッチーに決まったのは一七九八年一月五日であった。ペスタロッチーは早くも一月七日に着任した。約半年孤児たちと共に、苦闘に充ちた生活が始まったのである。

「私がシュタントツを去ったのは、私自身瀕死の状態であったにもかかわらず、決して私の勝手な決断によるものでもなく、むしろ軍の措置によるものだった。またその結果、私の試みの続行が一時まったく不可能になってしまったという事情によるものだった。しかし、人々は私がシュタントツを去るや、私には粘り強くことを運ぶ才覚や才能が無いという昔ながらの評判をまたもやたて始めたのだった。……」<sup>17)</sup>

ペスタロッチーはこのような辛い経験を経て、彼自身多くのことを学んだ。このことはわれわれにとっても重要な意味を持っている。

シュタントツでの彼の実践は、やがてブルグドルフでの教育事業に継承され発展するのである。

ペスタロッチーが、シュタントツにおける孤児たちと共に生活した経験から学び取った確信は、要約すると次のようであった。

① ペスタロッチーは一人で数十名の子どもたちを教えなければならなかったが、学級の秩序を保ち、学習効果を挙げるための工夫として、書いたり描いたりしながらの一斉復唱、石盤の利用、相互学習(教え合い学習)などがあること。

② 伝統的な学校教育は、言葉や文字を、理由なく不当に重視してきた。言葉(文字)本位の学習は、事物認識(直観)の能力にとって有害であり、子どもを消極的にする。それは真の民衆陶冶にとって無縁である。

- ③ 単純化された教材に即して、基礎的な認識能力を育て、これを確りと身につけさせることが大切である。それが子どもに生きる力（自信）を与え、学習への興味・関心を喚起し積極的な意欲を育てた。
- ④ 教え方の工夫（技術）によって、誰でも学ぶことができ、向上することが出来るのであって、誰でも人は、内面に無限の可能性を秘めているのであって、決して民衆に能力が欠けているのではない。<sup>(18)</sup>

ペスタロッチーは、シユタンツでの苦悩に充ちた経験によって、民衆の向上への無限の可能性を信ずることができた。これがシユタンツにおける最大の収穫であった。民衆を軽蔑しばかりに民衆の教化を嘲笑した人々への憤りを感じ得なかった。またそのような主張を裏付けてきた古き伝統的学校教育への弾効の叫びを、ペスタロッチーは挙げざるを得なかった。だがしかし、ペスタロッチーが民衆教化のための「術」(方法 || Kunst) の可能性を少なくともその脈絡を捉えたと自覚し始めたとき、彼はシユタンツを去らなければならなかった。

#### (四) ブルグドルフでの教授法の原則の確立

ペスタロッチーの親友フィッシャー (Fischer, Joh. Rudolf, 1772-1800) は、ペスタロッチーの方法の《基本原則》は、おおむね次の五点である、と指摘している。<sup>(19)</sup>

第一に、彼は精神の諸能力を内容的に高めようとしているのであって、単に外延的に表象を増やそうとしているのではない。

ペスタロッチーは、これをさまざまな方法で達成しようとして望んでいた。単語、説明、命題、やや長い文などを、大声で繰り返して子どもに言ってもらって聞かせ、それから子どもたちを復唱させることによって、彼は子どもたちの器官を発達させ、子どもたちの注意力や記憶力を訓練しようとしていた。

第二に、彼はその教授を完全に言語に結び付けていた。

ペスタロッチーは自然の実際の直観だけでなく、言語もまたわれわれ人類の基本的な認識手段であると考へていた。

第三に、ペスタロッチーは精神のあらゆる作用に基本事項か、分類項目か、それとも指導理念かを与えるように努力していた。

第四に、彼は教授 (Lehren) と学習 (Lernen) のメカニズムを単純化しようとしていた。

第五番目の原則は、この原則と関連している。つまりペスタロッチーは学問を民衆に広めようとしていた。

つまり彼は、自立的で賢明な生活をするために、万人が必要とするところの洞察力と思考力の基本を全面的に追求しようと努力していた。学問をパンに飢えた貧しい人々の見せかけばかりの《おもちゃ》とするのではなく、《学問》をパンに飢えた貧しい人々に、真理と知恵の最初の基礎を与えることによって、学問が彼らの無知 (Unwissenheit) 及び他人の悪知恵 (狡猾さ) (Schlaubert) の不幸な《おもちゃ》になる危険を取り除くことをペスタロッチーは望んでいたのである。

この目的は、教科書を用意することによって、果たされるべきものであった。ペスタロッチーは彼の著述からの収入を、彼の計画の実現のために、立案中の研究所、学校、孤児院建設の具体化のために向けた。

以上、五点についてフィッシャーは、ペスタロッチーの教育事業について述べている。

ペスタロッチーは、次のようにフィッシャーに感謝の念をあらわし、彼の死を悼みつつ新たに未来への出発の決意を示して、第一の書簡を終わっている。

「彼の手紙は、全体として、彼が真理を尊敬する、たとえそれが夜の衣をつけていようと、またそれが実際に

陰で包まれていようと、真理を尊敬する立派な人物であることを示している。彼はシュタンツで私と子どもの姿を見て感動した。その光景が彼に与えた印象以来、彼は私の一挙手一投足に、真剣な注意を払ってきたのだ。しかし、フィッシャーは、私の試みが成果を挙げる前に他界してしまった。もしも、この成果を彼がみておれば、私のこの試みについて多くのことを認知したであろう。悲しみのなかで、彼の死が私に新しい時代を創出する勇氣と希望を与えてくれたのだ。」<sup>20)</sup>

フィッシャーの人物を讀み、その死を惜しむ言葉でもって、ペスタロッチーは、親友フィッシャーの死によって、ブルグドルフにおける彼の仕事は新しい局面が拓かれるのである。ここで、第一の書簡は終わっている。

第二の書簡の回想、その二、協力者たち」

第二の書簡で、ペスタロッチーがまず紹介する協力者は、クリューズィ (Krüsi, Hermann・1775-1844) である。このクリューズィを通して彼はトーブラー (Tobler, Joh. Georg, 1769-1843) やブース (Buss, Joh. Christoph, 1776-1856) とも知り合い、緊密な協力関係を結ぶことになる。

とりわけ、クリューズィのペスタロッチーへの傾倒は深まっていた。

〈クリューズィがペスタロッチーから学んだ教育原理について〉ペスタロッチー自身は、次のように語っている。

(一) 決して忘れられないほど印象づけられ、よく配列された語彙集をしつかり覚え込ませれば、あらゆる種類の知識に対しても、一般的な基礎となり、これによってあらゆる知的分野においても、明確な概念に達することができる。

(二) 線 (Linie)、角 (Winkel)、弧 (Bogen) を書く練習は、事物を正確に見たり、描いたりするのに役立つ、これを何度もやれば、子どもたちのすべての物に対する直観 (Anschauung) は確かなものになる。

(三) 子どもたちと共に初期の計算練習をする場合、実物ないし実物に代わる物を用いて練習をさせることは、計算の基礎を一般的に確実なものにし、それ以後の計算の進歩を過ちや混乱から守ることになる。

(四) 歩く・立つ・横たわるなど具体的なことを暗誦させたり、記述させたりすることによって、あらゆる概念を次第に明瞭にして行くこと、クリューズイは悟った。経験に基づいて言い現す力、子どもたちが自分の直観的認識によって、統一的に、確実に、簡潔に総合的に捉えるための能力を獲得出来るに違いないということに、彼は気づいた。

(五) 直観から湧きでてくる真理は、偏見や誤謬が人間の魂に対して苦しい弁解や種々の雑多な策動を無用にする、というのは、そのような真理は、偏見や誤謬が人間の魂に侵入するのを、多くの面で自力によってくい止める力を人間に与えるからである。

(六) われわれの感覚を通して生まれる認識の全領域は、自然に対する注意深さと、我々が認識したものを熱意を持って採取し、保持しようとする熱意にかかっているものである。<sup>21)</sup>

彼は、自分の教育方法が、『自然と調和していること』をはっきりと認識し、次のことを彼に完全に確信させるに至った。

「すべての知識の基礎は教師 (Schulmeister) が、ただそれらの手段の使い方さえ、学ぶならばそれを手引きとして自分自身も、また子どもたちをも、教育指導 (Unterricht) によって目標とされているあらゆる知識へ高めることができるように、それらの教育方法を結合することである。従って、このやり方によれば、子どもたにあらゆる知識の基礎を得させるためにも、また両親や教師を、彼らにこれらの教育方法を共に練習させることによって、彼らに十分な内心の独立を得させるためにも、学識は必要ではなく、ただ常識とこの方法に習熟することだけが求

められるだけだ。」<sup>(22)</sup>

さらに、このことに関連して、クリューズイは、学識ではなくてむしろ《健全な思慮分別》を持つことと、さらに子どもをあらゆる知識に導き得るような教育方法に習熟することである、という確信を持つに至ったのである。

クジューズイは、ペスタロッチャーに出会う前、六年間も村落学校の教師 (sechs Jhre Dorfschulmeister) として、年齢も違う多くの子どもたちを指導してきたが、ペスタロッチャーの学校のように、子どもたちが、その能力を確実に柔軟に発達させる事例を知らなかった。

そこでクリューズイが気づいたことは、次の二点であった。<sup>(23)</sup>

第一に、最も簡単なことから始めて、これをわかり易く子どもたちにマスターさせ、徐々に前進させながら付け加えていく、という原則は子どもたちの内面に、学びの喜びを目覚めさせ生き生きとさせるものなのだ。

第二に、読み方授業のさいにペスタロッチャーが子どもたちに示す「ことば」や「絵」は、子どもたちにすぐ理解できる単純なものであるからこそ、将来の判断や推理の確かな手かかりとなるということ。

《トープラーが、ペスタロッチャーから学んだこと》

トープラーはバーゼルある名門の家庭で五年間も家庭教師していた。彼のこのような経歴と関連させて、ペスタロッチャーの事業の状態に関して次のように語っている。

「私は六年間の努力にもかかわらず、私の教育の成果、自分の期待していたところまで達していないことに気づいた。子どもたちの内的な諸能力は、私の努力の割りには向上していなかった。……私はこの時代の最善の教科書を用いた。それにもかかわらず、子どもたちの理解を越える言葉や概念に埋められていて、とうてい子どもたちの力とはならなかった。……私は自分の幼い生徒には直観的表象 (例えば絵や実物) を示すように、また年長の

生徒には産婆術的方法 (durch Sokratismen) で彼らに明瞭な概念をつかませるといふ試みをして見たが、言語認識を着実に育てる本がないため、結局、両方とも成功しなかった。そして彼は、この自分の悩みや困惑が、決して自分ひとりのものではないことを知り、とくに熱心な下級学校の教師たちが、この点について感じている困難さは、二倍も十倍も重く彼らにのしかかってくるに違いない、と私は感じた。<sup>(24)</sup>

トープラーは、教育制度全体に及ぶこの欠陥を埋めるための方策を追求しようとするが、やがて彼が一生かかっても目標を達成する事は出来ないと感じていた。そんな時、彼はフィッシャーとの文通によって、ペスタロッチーの方法を知るのである。

そしてトープラーはペスタロッチーが、自分のような体系的で学問的な方法によることなしに、自分の求めている目標に到達するかもしれないと感じた。それはペスタロッチーが既成の方法や技術には全く拘束されていないように思われたからである。

とりわけ、トープラーはペスタロッチーの方法における次の原理、すなわち「母親が、自然によって明確に定められているその使命を再び果たせるようにと、母親を教育するというペスタロッチーの方法の原理が、彼を引き付けたのである。彼自身の仕事もまた、まったく同じ原理から始められたものであった。」<sup>(25)</sup>

バーゼル (Basel) に来たクリューズイ (Kriess) の説明を聞き、またその実地の授業を見ることによって、それからまたクジュージが持参した若干の教材類に接することによって、トープラーは、ペスタロッチーの方法が卓越しているという信念をいっそう強くしたので、彼はためらう事なくペスタロッチーの申し出に応じた。ブルグドルフに来て、トープラーはやはり来てよかったと思つた。

彼は言っている。「私はブルグドルフに来た。そして着いたとたんに、この始められたばかりの仕事が私の期待に

添うものであることを知った。子どもたちの見るからにすばらしい、そして全面的に発達した能力、この能力を生み出した教育方法の素朴さと多様さ、それが私を驚かせた。これまでの伝統的な教授法、いっさいに対する彼らまったくの無関心さ、彼が子どもに示す絵の素朴さ、彼の教育方法の内容はいくつかの部分にはつきり分かれ、それが別々の機会に積極的な方法によって習得されて行くように仕組まれていた。彼の教育方法の内部分類の見事さ、複雑なもの、混乱したものすべてを避け、あらゆる力の強化をひたすら目ざす彼の無言の働きかけ、……とりわけ彼の教育方法のいくつかが、あたかも新しい創造物のように、人為的技巧と人間の本性という源から自然とわき出てくるように、私には思われたあの力強さ、これらすべてのものが、ひととき強くわたくしの注意をひきつけた。<sup>20</sup>」

ベスタロッチーが、このように多くの試みによって、子どもの内面に秘められている無限の可能性を開花させることや、これらの方法の実施を促したところの根柢や原理を説明することを、ひたすら求めているということ、とりわけ子どもを受容能力（感覚能力）一般の育成に係わって居るのだということが、トープラーには深く理解出来たのである。

さらに、トープラーは「彼（ベスタロッチー）の試みが、秀れているという私の確信は、日毎に強まってきた。……母親たちが自然によつてはつきりと定められた使命を再び果たすことができるように教育することは、実際可能であるという確信を持つに至ったのだ。

要するに、私は、私が教職経験の初期に非常に熱意でもって私の内から培ったところの、経験を重ねるうちに、現代風の教育技術やら、教具、教材やらに圧倒されてほとんど失いかけていたところの信念を、つまり人類を高貴なものにすることは可能であるという信念を、ここでの全体の印象によって、一貫して変わらなかったここでの見



解の結果によって、再び私の心の中に打ち立てるに至ったのである。」<sup>(27)</sup>と、述べこのトوبرラーの言葉でもって、第二の書簡は終わっている。

### 第三の書簡・…回想、その三、

#### (二) 有能な協力者たち

第三の書簡では、親友ゲスナーに対して、主としてブース (Buss, Joh. Christoph) の紹介をしている。まず、ペスタロッツナーは、冒頭次のように述べている。

「今度はブースの意見をお伝えしよう。ゲスナー君よ、下層階級の人々のなかに潜んでいる諸能力について、私がどのように評価しているかは、あなたもご存じだ。ブースはまさに私のこうした意見を正当づけてくれる生き証人だ。」<sup>(28)</sup>

さらに続けて、ゲスナーに語りかけている。

「愛する友 (ゲスナー) よ、世界は有能な人に満ちている。だが有能な人間を掘り出す人々を欠いているのだ。人間の有能さについての考えを自分自身の心のうちに閉じ込めてしまっているのだ。」<sup>(29)</sup>

つまり、ペスタロッツナーは、恵まれない家庭の子どもたちや、間違った教育のためにせっかくの素晴らしい才能を発揮することのできなかつた多くの人々の上に思いを馳せているのである。クルューズィ (Krüsi, Hermann) やトوبرラー (Tobler, Joh. Georg) 、そしてブースの成長ぶりをみるにつけても、ペスタロッツナーは古き教育の誤りを痛感しないわけにはいかなかったのである。この彼の気持ちが第四の書簡以下における激しい旧教育の批判につながってゆくのである。

トローブラーは、少年時代、家が貧しくて勉強する機会がなかったが、二二歳のとき、突然、神学を志し、熱心に書物に取り組んだ。生活の糧をうるために家庭教師をして学問を続けた。しかし、彼はやがて身につけた知識が、彼の人間としての発達にとつていかに無力であるかということを知ったのであった。

そして、ペスタロッチーは、もしトローブラーが困難な初歩の基礎的学習さえやれば、彼が身につけている知識と相俟って、上級学年の学習指導法の開拓に進む可能性があるかと、その才能の開花に期待しているのである。

さらに、クリューズイについては、ペスタロッチーは、その卓越した能力が「方法」を身につけることによって初めて発揮され、申し分のない教師になったことを認めたのである。

## (二) ブースの紹介

ブースは、ドイツのチュービンゲン (Tübingen) 生まれ、父は神学校に勤め校内に住んでいた。すでに、三歳のころからラテン語学校に通い、八歳の時にピアノを習い一二歳のときには教えられるくらいまで上達していた。一一歳の時には絵を習いめている。こうして彼は一三歳になった時、進路を決めなくてはならない年齢になっていた。両親の希望は、シュットガルト (Stuttgart) に新設された学芸アカデミーか、チュービンゲン大学に、入学をさせることであつた。ブース自身も強始く進学を希望していた。ブースは当時のことを次のように回顧している。

「このアカデミーは、あらゆる階層の出身者が、有料であるいは授業料免除で、入学を許可されていたのだ。しかし、私の両親の資力では、私の授業料を払うことはできなかった。そこでアカデミーに授業料免除で入学許可を求めたが、これは学長自身の署名入りの拒絶の通知と一緒に送り返されて来た。その拒絶の通知は、中、下層市

民、農民層子弟をすべて大学進学から締め出す規定だった。それと共に、私は大学進学の意欲もすっかり消滅してしまつた。そして私は自分のすべての力を絵画に注いだ。しかし、それも半年あまりで出来なくなつた。製本工場  
の徒弟として働かなければならなかつた。一生懸命手仕事に打ち込んだ。私は少年時代の夢にまつわる思い出の一切を、私自身の心から消し去るために、夢中で働いた。それは、言いようもなく悔しく不満だつた。」<sup>30)</sup>

ブースは、下層階級の出身だからという理由だけで、教育を受ける道を閉ざされ、少年時代の大部分をその実現のために費やした希望や抱負を彼から奪い去つた権力の横暴に対する激情が募ってくるのを、ブース自身どうしようもなかつた。

彼は旅に出た。しかし、彼の心は少しも癒されなかつた。転々と仕事を変えるなかで、音楽や絵をもっと練習したいと思つた。そうした時、「私はトープラーと知り合いになつた。ペスタロッチャーが新しく構想している教授方には、図画と音楽の分かる人間が必要だと、クリューズイが言つたとき、トープラーはすぐに私のことを思い出してくれたのだ。」と、ペスタロッチャーとの出会いを述べている。

### (三) ペスタロッチャーとの出会い

ブースは、ペスタロッチャーがどんな人であるのか、自分で確かめようとして、ブルグドルフにやってきた。ペスタロッチャーに始めて会つたときの印象をこう語っている。

「初対面のペスタロッチャーは、やはり私の想像した通りだつた。ズリ落ちた靴下・・・それは見るからに埃っぽく、ひどくほころびてた・・・、彼は二階の部屋から私の方に降りて来た。この瞬間に私の受けた感じは、それを表現する言葉を知らないほど、彼の姿はいたわしいという感じだつた。・・・この人がペスタロッチャーなんだ、目

の前にいる人が！ その人の良さ、初対面を喜ぶ彼の様子、その偉ぶらない態度、その素朴さ、そして、私の前に立つそのポロ姿、これらすべてが、たちどころに私を魅了してしまった。今までこんな感動させられた人に会ったことがなかった。また、これ程私に信頼の気持ちを起こさせた人もなかった。」<sup>(32)</sup>

#### (四) ブースの学んだこと

ペスタロッチーとの出会いによって、ブースは多くのことを学んだ。

「ペスタロッチーの《直観のABC》とは、《線 (Line)》、角 (Winkel) 、弧 (Bogen) こそ、図画の基本である》、と言ったとき、ペスタロッチーが何を言おうとしているのか、全く解らなかった。ペスタロッチーは、それを説明しようとして、私にこう言った。

《人間の精神は図画においても、曖昧な直観から明瞭な概念へと高められなければなりません》。<sup>(33)</sup>

この原則がこそが、ペスタロッチー教育方法の根本であった。

ブースは、また次のように述べている。

「私は、自然の歩みと完全に一致しているということ、また、Kunst (方法・技術・テクニック) と言うものが、人間の素質の発展を本質的に促進する仕方、人間の精神に対して働きかけるように、自然を仕向けるためのものであり、その限りにおいて方法 (Kunst) は必要である、と言うことを理解しました。《直観のABC》は、直観の対象或いは教授術 (Kunst) の対象について、正確な言語表現を子どもにも与えるものであるということ、そしてこの言語表現の習得に比例して、子どもは対象を正確に認識したり、比較することが、だんだんと厳密に出来るよ

うになることを私は知ったのだった。さらに、この方法が他の教科においても、算数や言語についても全く同じように有効であることを知った。<sup>(34)</sup>」

ペスタロッチーの方法は、その効果を人間の精神に及ぼして、子どもに自助の能力、つまり自主的に学習して行く能力を育むものであるという確信をブースは持つのである。

「ペスタロッチーの《方法 (Die ganze Methode)》の一切は、初歩点という糸口を握ってしまえば、誰にとっても遊戯のようにやさしいもので、もう迷路に踏み込むことはありえないのだ。」<sup>(35)</sup>

さらに、ブースは、最後に言っている。

「私はこの方法を知ったお陰で、少年時代の明るさと力を、再び取り戻した。それに、私はずっと以前から、夢と思っていたところの希望 (Hoffungen)、この私や、人類にとつての希望が再びよみがえってきた。」<sup>(36)</sup>

ペスタロッチーは、彼の弟子とも言えるクリューズィ、トープラー、ブースと共に伝統的学校教育における階級の特権を批判し打破して、教育の門戸を広く民衆一般に、解放し、下層階級の子どもでも学べる民衆教育の具体的実現に取り組んでいったのである。

#### (五) 新たな教授法の開発

その成果は、一八〇〇年の夏、大臣 (Staater. P. A. 1766-1840) の肝入りで出来た「教育の友の会」は、ペスタロッチーの民衆教育の「方法」について調査し、その報告書を提出している。

「われわれが第一に気づいたことは、ペスタロッチーの学校の子どもたちが、驚くほど速やかに、また極めて完全に《綴ること》《読むこと》《書くこと》《計算すること》を学習することであった。かれらはそれらの教科にお

いて、どこの村の学校教師でも三年かかって彼等を高めうる段階まで、わずか半年で達することが出来た。．．．しかし、われわれは、教師その人がこの驚くべき現象を引き起こしたとは思わなかった。われわれは教授法そのものに原因があると考えた。では、この教授法の本質は何か、それは自然にのみ援助を求め、自然を真の教師とするところにある。いくらか学問的に表現するならば、こんなふうにも言ってもよいだろう。すなわち、この教授法の本質は、ただ直観のみから出発して、子どもを次第に、そして自ずから抽象概念に導いてゆくところにあると。この教授法には、もうひとつの長所がある。どんな場合にも決して教師というものを優れたものとは認めさせないという点である。つまり、教師は、決してより高い種類の人間ではなく、愛すべき自然のごとく、子どもと共に存在し、生活すること、あたかも自己の同輩に対するが如くであつて、子どもに何かを教えるというよりも、むしろ子どもから学ぶように見える、ということだ。」と、ペスタロッチーの愛弟子であつたドウ・ガン (Roger de Guimps 1812-1894) は、『ペスタロッチー伝、その生涯と思想』のなかで述べている。<sup>(47)</sup>

さて、ペスタロッチーは、第三の書簡の終わりに次のように述べている。

「わたしはここに次の一言だけ言い添えておかなければならない。この方法を知って、わたくしは青年期にもつていたあの快活さと力強さを大部分再び取り戻すことができ、わたくしが長い間かつ今日まで夢と考え、躍る胸を抑えながら棄てさるうとしてきた希望、あのわたしと人類との希望もふたたび甦つてきたということだ。」<sup>(48)</sup>

#### 四、『知識の陶冶』その一、(第四・五・六の書簡)

##### 第四の書簡．．．．本論その一

第四の書簡から第六の書簡まで、本書の総論であり最も重要な部分である。すなわち、ペスタロッチーはこの書

において何よりもまず民衆教育の解放のために全力を尽くしている。

## (二) 授業改革 (教育改革)

ペスタロッチーの直接見た当時の学校は、子どもが入学すると同時に、彼らを文字の世界に引き入れ、それによって「直観なき概念」の世界に導き込み、しかも学校生活が終わるまでその中に閉じ込めて置くが、それがペスタロッチーには、許すべからざる犯罪だと思われた。教育は子どもたちにとっては苦心惨たんたるもので文字の学習から始められ、最後にはキリスト教問答書の機械的な読みと無理解な暗唱とが強制される。それはまさに、わが国の第二次世界大戦前の天皇制国家主義教育体制下における小学校で『教育勅語』を暗記したように、ペスタロッチーはこの非教育的な学校を激しく呪った。

ここでは、彼の仕事を歴史的に評価するため極めて重要な叙述が含まれているばかりでなく、特に第四の書簡には、この書で最も強く読者に感動をさそう部分がある。

彼は、まず自己自身の《授業改革》ということの歴史的意義を次のように説明している。

「シュタンツを去ってからというもの、あんなふうにして追い払われ、疲れ気っていたものだから、私の昔ながらの民衆教育計画の理念 (die Ideen meiner alten Volksziehungspläne) <sup>(88)</sup> となえ私自身のなかで萎縮し始めていた」

一九世紀初頭のこの時代は、啓蒙思想の影響のもとに民衆の間に教育への期待が溢れていた。しかし、高等教育、中等教育そして、初等教育さえも、民衆はひじょうな熱意でもってこれを支持し、推進しようとしていた。

ルソー (Jean. Jacques Rousseau 1712-1778) の『エミール』 (Emile) やその強い影響の下にあった汎愛派のバ

セドウ (Basedow, Johannes Bernhard 1724-1790) サルツマン (Salzmann Christian Gotthilf 1744-1811) のようにザルツマンの啓蒙的教育書が民衆に読まれた時代であった。

ペスタロッチーの『リンハルトとゲルトルート』(‘Lienhard und Gertrud, Ein Buch für das Volk’) が多くの人に読まれたのもこのような時代思潮のなかのことであった。「世界の半分が、教育改革という目的のために立ち上がった時代でもあった」<sup>(40)</sup>。

啓蒙の世紀を経て、高等教育も中等段階の教育も、さらに初等段階の教育でさえも勤勉と誠実さをもって進められており、その功績や成果は実に素晴らしいものであった。

だが、「しかしながら教育制度全体として・・・私が見た限り、現実の学校教育は、私が見る限りでは社会全体にとつても、最下層の民衆にとつても、全く何の役にも立っていないということを率直に認めざるをえなかった」<sup>(41)</sup>。

この時代の思潮を受けて、学問や教育のレベルは驚くほど高まってきたが、この学問や教育は、一人一人の民衆の生きる力を担っているであろうか、本当に幸福にしているであろうか、ペスタロッチーは、この大きな疑問に打ち当たる。

彼は、次のようにその心情を語っている。

「学校はあたかも次のような一軒の大きな家のように私には見えた。つまり、この家の最上階では、確かに立派で申し分のない学術が栄えているが、そこに住んでいる人はほんの僅かだ。真ん中の階には、もう少し沢山の人が住んでいるが、この階の人には人間らしく階段を上がって行くこうとしてもそのための階段がないのだ。かといって、もし彼等が無理やりによじ登ろうとする気配をみせると、人々は、そんなことが出来ないように、あらかじめ



彼等の腕や脚を叩き折ってしまうのだ。しかも第三の階にはものすごく沢山の人間がうじゃうじゃと住んでいる。この階に住んでいる人間だって上の階に住んでいる人間と全く同じように、太陽の光を仰ぎ、健康な空気を吸う権利を持っているのだ。ところが彼等は、窓もない穴蔵の薄気味悪い暗がりの中に置かれているのだ。そればかりでなく、もし彼等が上の階の學術の輝きをのぞこうとして、ほんのちよつとでも思い切つて頭を持ち上げたりすると、人々はたちまち無理やりにその眼玉をくりぬいてしまうのだ。」<sup>(42)</sup>

そして、さらにペスタロッチーは当時の学校の在り方をこう激しく批判している。

「親愛なるゲスナー君よ、こうした事態を見て、私は否応無しに次のような確信を持つに至つたのだ。ヨーロッパの多くの人間を無氣力にしている《学校悪》(die Schülbel)と言うものを、単に表面的に繕うのではなく、その根底から矯正することが肝心でもあり、緊急でもあるのだ。……つまり、人間の精神が感性的な直観から明晰な概念へと高まつてゆくその過程を支配する普遍的な法則にしたがつて、教育指導の機械的な形式を定めるところまで行かなければ、学校悪を抜本的に排除することは不可能であるという感情が日々に大きくなつた。……教育指導の根本原則を全面的に自然の歩みと一致させるようにすることがどうしても必要だと解つた。」<sup>(43)</sup>

ペスタロッチーは、身分差別的学校教育がヨーロッパの青少年たちから未来への明るい希望を奪い去り、彼等を無力にしてしまつている現実を呪つた。既に述べたようにブースもその被害者の一人であり、クリューズイヤトーブラーも、例外ではなかつた。

「友よ、人間は善であり、善を求めている。人間が善を行うときには、ひたすら幸福を求めているのだ。そして、もし彼が悪であるならば、それは人々が善に志す彼の道を塞いでしまつているからだ。」<sup>(44)</sup>

## (二) 教授法の五原則

ペスタロッチーは、授業の技術が、教材の選択や配列に関して、基本的原則を示しているのだと、確信していた。そして、教授法の五つの原則を次のような提案をしている。<sup>45)</sup>

(一) ゲスナー君は、なにか複雑なものの認識に進む前に、まず君の直観を整理しなさい。そして単純なものの直観を仕上げよ。どんな領域の認識の《術》(Kunst)であれ、認識の段階を整えるように努力せよ。

(二) さらに、本質的に互いに関係しあっているすべての事物は、それが自然の秩序のなかで現実に持っている関係と全く同じ関係で君の精神のなかに持ち込むこと。……

(三) 他のものより重要な対象は、《術》によってもっと君に近付け、いろいろの感性を通して君に作用させるという仕方です。その印象を強め、かつ明瞭にせよ。……君の直観において君の職業陶冶 (Berufsbildung) において、そして君の徳性において、一切の確かさを決めるといふことを決して忘れてはならない。

(四) 物理的自然 (Physischen Natur) の一切の活動は、必然的なものと見なせ。……

(五) しかし、物理的必然性の成果に豊かで多面的な魅力や応用の可能性が在ると、その成果に自由と自律の印象を広く帯びさせるものだ。<sup>46)</sup>……人間の自然の本性の発達を支配するこの五つの法則はすべて、それがどこまで広がろうと、一つの中心点をめぐって広がって行くのだ。

われわれひとりひとりを中心として自然は広がって行くのだ。ここにペスタロッチーの人間観・世界観が表現されている。

第四信の終わりに、彼はこう付け加えているのである。

「友よ、私がいかにそうであるところのすべて、

私が意志するところのすべて  
私が為すべきところのすべて

これらのすべては私自身がその出発点なのです。私の認識もまた私自身がその出発点であるべきではないだろうか。<sup>(47)</sup>

われわれは、ペスタロッチーが一八〇〇年に著した『メトード（人間教育の序説）』の論述のなかで、『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』の内容を予見することが出来る。<sup>(48)</sup>

### 第五の書簡と本論、その二

ペスタロッチーは、冒頭「私はあなたに、一般的心理学的教授法について命題を提言してきた。これらの命題では十分ではない。……」<sup>(49)</sup>と自ら反省している。彼は、人間の知識の自然的な源泉を探究しようとしている。そこで、自然の法則の本質について三通り源泉を提案している。

彼は、人間教育の根本思想を自然の法則の本質に基づいて、明らかにしようと努力している。自然の法則は、『三通りの源泉』を持つと考えている。ペスタロッチーは人間のあらゆる精神活動（認識）を可能にする最も中心のな力を『直観』と呼んでいる。<sup>(50)</sup>

《直観》の三つ源泉について次のように説明している。

第一の根源は、自然そのものであり、われわれの精神を漠然とした《直観から明瞭な概念》まで高めるところのものは、自然そのものである。自然という源泉から、次の根本命題が出てくる。

(一) われわれが自然の事象を正しく明確に認識するのは感覚によるのである。

- (二) 人間の精神に深く刻みこまれて、忘れ難くなった直観は、どんな直観であれ、その直観には、この直観と多かれ少なかれ関連している副次的な諸概念の全系列が、極めて自然に結び付けられているものである。
  - (三) ある事柄の本質的な属性が、その偶然的な属性よりもはるかに強力に君の精神に刻みこまれたとき、おのずと君の精神の組織は、正確に見ることが出来るであろう。
  - (四) 本質を同じくする諸対象を集めて整理することによって、君はこれらの諸対象を、より広い見地から、より厳密に、確実に考察することができ、その本質を正しく把握できる。  
人間がもし事物について、このように総合的、かつ一般的な見方を身につければ、個別的、非本質的な見方によって惑わされる恐れはなくなる
  - (五) この上なく錯綜していると思われる《直観》でも、単純な基本要素から成っているのだからそれを捉えてはつきりさせれば、単純な直観になる。
  - (六) 事物の本質あるいは現象を研究するにあたって、多くの感覚を働かせればするほど、その事物についての君の認識は、より正しいものになる。<sup>(1)</sup>  
ペスタロッチーは、われわれの鋭敏な全感覚によって事物を認識するのだと言う。すべての《五官》による対象の認識であり、全人格による認識、つまり《全人教育》である。
- 第二の源泉は、直観能力と全面的に関わっているところの、人間の自然本性の感性である。この感性は、一つは探求心であって、対象のすべてを知ろうとする積極的な力である。他方は、探求心を静めて対象と一体化し、あるがままを受容しようとする傾向である。

前者は、人間の探求心の感性的基礎として、後者は判断における冷静な感性的な基礎として見た場合、人間の認

識を正しく支えるものとして捉えることができる。

第三の源泉は、「人間の外的境遇と、人間の認識能力との係わりのなかに求められる。」これは人間の真理認識の具体的条件を述べたものである。人間は、めいめいが生まれ育った家庭や地域の中で生活する。これが人間の《生活圏》である。人間はこの生活圏のなかで暮らす。そこでの混沌とした《直観》のなかで、術 (Kunst) による整理が必要となってくる。

ペスタロッチは、外的事象を全人格的な感性によって認識したものを、いかに整理し「生きる力」とするか、さらに深く具体的な探究については、第六の書簡で述べている。

#### 第六の書簡：…本論、その三

ペスタロッチは、第六の書簡で本論の締めくくりをしている。

#### (二) 知識・技術の基本要素

彼は、第四・第五の書簡で、人間の精神の自然のシステムの諸原理を明らかにしてきた。まず、冒頭親友のゲスナーに、今までの苦勞を語りかけている。

「親愛なる友よ、私の仕事の理論を明らかにするために、私がどんなに苦勞しているかということくらいあなたもわかってくれるだろう。私は、私の計画を実践してゆくに当たって、七面倒くさい哲学など、というものは一切必要としなかった。しかし、私は、私の活動する場において、全神経を最高度に一瞬一瞬を緊張させて生きてきた。私は自分が何を望んでいるかを知っていた。私は明日のことを思いわずらひはしなかったが、何時如何なる時

も、今必要なものは何かということとはわきまえていた。<sup>(52)</sup>

ベスタロッチーは、ここまでに至るプロセスを振り返って、自分の陥った誤りを正直に告白し、自分の教育方法の原理を一層よく読者に理解させようと試みている。

「私の教育方法の原理・原則を、そのまま教科に、つまり人類が、人類の素質を発展させるため幾千年の経験から手に入れたところのもの、そして私があらゆる技術 (Kunst) と、あらゆる知識の基本と見なしていたところのもの、つまり《書き方 (Schreiben)》《読みかた (Lesen)》《算術 (Rechnen)》などに適用しさえすればよい、と考えた。」<sup>(53)</sup>

## (二) 人間の精神発達の普遍的形式

さらに、「私は長い間、授業 (Unterricht) のこのような技術手段 (Kunstmittel) すべてについての普遍的な、心理学的な根拠を探し求めた。というのは、自然そのもの本質に即する人間形成の形式を見出すためには、それ以外に方法はないと確信していたからだ。」<sup>(54)</sup>

授業の心理学的根拠は、「すべて《悟性》(Verstand) の成果である。それは《成熟した直観》によって作り出された成果である。」「したがって、授業の根本原理は、人間の精神的発達の不変の根本形式から導き出されなければならぬ。」<sup>(55)</sup>

「授業の方法 (Kunst) は、次のようにすすめるのだ。入り乱れて流れ込む《直観の対象》を、一つ一つわれわれの前に示し、そこからバラバラにされた直観の対象をさまざまに変化する状態において観察し、そして最後にそれを、われわれの既に持っている知識の総体に結び付けるのであると、このようにして、我々の《認識》は、《錯

綜》から《明確》へ、《明確》から《明瞭》へ、明瞭から《明晰》へと進んで行く。』と、述べている。<sup>(36)</sup>

つまり、ペスタロッチーの考える教授の課題は、まず漠然とした直観を整理し、分類して、明瞭、明晰な疑念とし、確かな系統的知識を増殖して行くことと考えているのである。

私たちはここで、ヘルバルト (Herbart) の《明瞭・連合・系統・方法》という認識の四段階説が、不十分ながらもすでに明らかに萌芽している、ことを知るのである。

### (三) 認識の原則としての《全人教育》

ペスタロッチーは、認識の原則として五官による《全人教育》を提唱している。認識の明瞭さというものは、私たちの感覚に触れる対象物と私たちの間の距離の遠近によって決まる、これが自然の大原則である。「物理的に生きる存在（生物）としての人間は、五官以外の何者でもないのである。」<sup>(37)</sup>つまり総体としての人間、それらは《全人》としての存在である。いっさいの外的対象物が、この人間の五官によって認識されるのである。

ペスタロッチーによれば、人間にとって最も明晰に直観し得るものは、自己自身の五官であり、《総体としての人間存在》であり、《全人》であり、自己自身である、ということになる。

つまり「真理の認識は、人間の場合、かれ自身についての認識から出発する」と云うことが、もともと自明の原理となる。

### (四) 真理の認識へ・・・形、数、言語

真理の認識に至るためには、人間自身にとって、次のような能力が身についていることが必要であると、ペスタ

ロッチャーは言う。

- ① いろいろな対象を、《形・Form》の違いによって見分け、その内容を思い浮かべることができる能力
- ② これらの諸対象を《数・Zahl》によって区別し……明確に思い浮かべることができる能力
- ③ いくつあるのか、どんな形をしているのか、と言うことがわかっている対象をさらに《言語・Sprache》によって思い浮かべ、その記憶を確実にする能力

そこでベスタロッチャーは、次のように判断した。《数》《形》及び《言語》は、いずれも授業 (Unterricht) の基礎手段である。

授業 (Unterricht) における認識のプロセスを、ベスタロッチャーは次のように捉えている。

「ある対象の外面的属性はすべて、その最も本質的な属性である輪郭の《形》において、及び《数》の関係において統一され、さらに《言語》によって、《私の意識に保存されることになるからである。》<sup>(8)</sup>

「技術 (Kunst) は、数・形・語というこの三つの基礎から出発して、次のような作用を行うことを、技術による陶冶 (Bildung) の不動の原則にしなければならぬ。

- (一) 子どもたちの意識にのぼるどんな対象であれ、単一体として……把握するように、子どもたちに教えること
- (二) どんな対象であれ、その形を、つまり大きさや割合を知るように、子どもたちに教えること
- (三) できるだけ早く、子どもたちが見知っているすべての対象を示す《語》や《名前》を、あますところなく子どもたちに覚えさせること。



(五) 教育方法の出発点

こうして、『子どもの教育方法』が、この三つの基礎から出発すべきことは明らかであり、また技術の最初の努力が、教育方法のこの三つの最初の点に、最大限可能な単純性・包括性及び調和性を与えることに向けられねばならないということも明らかである。

最後に、ペスタロッチーは、人間の認識を成り立たせる三つの基本的能力を次のように指摘している。<sup>(50)</sup>

- ①《言語》能力の源としての音声能力
- ②《形》の意識の源としての、不明確で、たんに感性的な表現能力
- ③《数》(単位)の意識および計算能力としての明確で感性的でない表現能力

われわれ人間のこの三つの基本能力が、最初に人間に与えるもの、それが音声・形・数なのである。だから、技術(Kunst)による《人間の教育》は、どうしてもこれらの能力を出発点とし、常にこれと結び付いていなくてはならない。

それは、人間の自然の本性に、人間の精神の発達の自然のメカニズムが、合致するような教育の方法でなければならぬのである。

こうして、ペスタロッチーは、つぎのような結論に到達したのである。

「技術(Kunst)によるわたたくしたち人間の陶冶は、この三つの基本能力の、最初の最も単純な成果、つまり《音声》《形》《数》に結び付けられねばならない。……」<sup>(51)</sup>

## (六) 教育指導の基本原則

ペスタロッチーは、人間の三つの基本能力である《教》《形》《言語》を、全面的・調和的に發展させて教育指導を完成させようとしているのである。そして、到達した教育指導の結論として次のように述懐している。

「ついに、私は教育指導の技術(方法)を、自然とあるいは、むしろ自然が世界の事物を全面的に明瞭にする際の根本形式と、本質的にも密接に結び付けることに成功した。同時に、教育指導のための一切の技術的手段の一般的根源と、人間の形成を我々の自然本性そのものの本質によって規定することが出来るような形式とを発見するという問題に、答えることも出来た。こうして、私が人間にふさわしい教育指導の基礎とみなす機械的な法則を、幾千年もの人類の経験が、人類自身の發展のために、人類の手に与えたところの教育指導の形式(Unterrichtsform ≡ 教授形式)に、つまり書き方(Schreiben)、算術(Rechnen)、読み方(Lesen)などに、適用するにあたっての困難は除去された。」<sup>(1)</sup>こうして、ペスタロッチーは《教育指導の根本原則》を自然の發展に人間の本性の發展を託したのであった。ペスタロッチーは第四・第五の書簡の記述をとおして、教授(Unterricht)について検討し考察を加えてきたが、この書(『ゲルトルートはいかにその子を育てたか』の総論部分を第六の書簡で締め括っている)。

## 五、『知識の陶冶』(その二)・・・各論(第七・第八の書簡)

ペスタロッチーは各論(第七・第八の書簡)で言語・形・数の教授について述べている。彼の合自然的な諸原則を学校の授業(Schulunterricht)に適用しようとしたとき、彼は読み書き・算という当時の教科が学習の出発点とは見なされ得ないことを発見した。彼によれば、教科の中で使われている《線》《数》《語》のような教授手段

は、本来教科が始まるまえに、取り扱われなければならないと考えていた。彼は思考の原形としての究極の単位は《数》《形》《語》と考えていた。

### 第七の書簡・・・各論、その一、「語」・「形」の教授

第七書簡では、「語」と「形」の教育方法を扱っている。具体的に説明しておきたい。ペスタロッチーは次のように提言している。<sup>(82)</sup>

#### (一)「語(言語)」の教授

ペスタロッチーによれば、「語」の教授は三段階に分かれるという。授業の基本的手段の第一のものは、《音》であり、《音》から、次に示す授業の方法が導き出されると言う。

①音の指導 (Tonlehre) ……言語器官を育成する方法

②単語の指導 (Wortlehre) ……個々の事物を認識することを教える方法

③言語の指導 (Sprachlehre) ……既知の事物について、認識すべき事柄について、明確に表現できるように指導する方法

#### ①《音》の指導

これは《話し言葉》のための音声指導と、《唱歌のため》の音声指導とに分けられる。

ペスタロッチーは、音の指導を聴覚の訓練と発音の訓練とに分けている。

具体的な指導の順序は、(一) 読んで聞かせる

(二) 読んで聞かせて、口まねをさせる

(三) 文字を読ませる

(四) 文字を綴らせる

②音の能力、あるいは音の基本的手段から生まれてくる第二の特殊な授業手段は、《単語の指導》あるいは《名称の指導》である。

③音の能力に由来する授業の第三の特殊な手段は、言葉の指導そのものである。

この三つ段階こそ、ペスタロッチーがもつとも言葉指導で重要だと考えている。彼の言葉指導の中心もここにあると言っても過言ではない。当時の教育制度の批判や授業の在り方をこうした視点から、彼自身の教育技術研究の歴史的意義を強調している。

第七の書簡の冒頭、ペスタロッチーは自信をもって次のように語っている。

「教育の技術が、われわれ人類がつくりあげた特性であるところの言葉を利用しつつ、人類の自然の発展の仕方と歩調を合わせることでできるような、本来の意味での授業形式が展開し始めている。そういう時点に、今私は立っている。さらに、教育の技術とは、人間が自然存在で在りつつ、しかも自然のままでは在り得ないものになりうることを、促進し、助ける技術である。」と、考<sup>(83)</sup>えている。

ペスタロッチーは漠然とした直観から、明確な概念へと進む自然の歩みのメカニズムを最高度に完成させるためには、これらのことが、すべて言語指導の完璧な技術と最高の心理学によって、達成されなければならないと考えていた。

ペスタロッチーにすれば、漠然とした直観を明瞭な概念に高める本質的な手段は、《言語》指導であるという強

い信念を示している。

さらに、彼は「私は学校教育 (Schulunterricht) を年老いて、口をもぐもぐさせているだけの奴隷的教師 (Schulmeister-Knechte) の生気に乏しい授業からも、また普通民衆教育 (gemeinen Volksunterricht) と言う観点からすれば、それと本質的に変わることのない新米教師たちの自信のない授業からも解放したい。そして学校教育を、自然そのものの確固たる力に、神が父や母たちの心の中に灯し給う、かつ永遠に見守り給う灯火に、そしてまた、子どもたちが神や人に愛されることを願う父母たちの切なる気持ちに結び付けたい。」と述べ、当時の伝統的学校教育の在り方に対して授業の改革を訴えている。

## (二)《形》の教授

ペスタロッチーは、「《形》の教授は、形のある事物の直観的認識が先行する。」<sup>(65)</sup>と言う。

さらに、「形」の教授は、対象の形(輪郭)を正確に捉えること(測定)、その形を正しい名前で呼ぶことを含めて、それを正確に写すこと(図画)、話し言葉を文字で表すことも含めて、正しい文字を書くこと(書き方)を目標として行われる。それは、日常の様々な経験を通して子どもたちの能力として生きる力になるのである。

ペスタロッチーは、この「書くこと」の指導においても、「話すこと」の学習の一つの形態であると考えている。彼の指導方法によれば、未熟な教師や母親でも子どもたちを十分に、安心して指導出来ると言うことを強調している。民衆の子どもたちに、《確かな学力》を育むことの必要性を説いているのである。民衆の子どもたちに、学校を解放し確かな学力を身につけた青少年の育成こそ、民衆の幸福への途だと強い確信を抱いていた。

そして、言語は文化の基礎であり、自然的な経験の再現であり言語学習の重要性を説いている。さらに、民衆の

文化的、道徳的向上の可能性を信じようとしなかった上流階級の人々、そのような能力があると言うことを認めようともせず、また民衆の母親たちの内在的可能性を育てようとしなかった当時の教育指導者たちを、厳しく批判している。

ペスタロッチーはこの第七の書簡の最後に次のように述べている。

「書き方学習は、単に技術としてではなく、職業上の事柄として完成されるものであり、また子どもは、こうすることによって自分の考えを、言葉で表現するためのこの《書くという》人為的な方法を、《話すという》こと自体と同様にたやすく、また一般的に駆使することが出来るようになるものだ、と言うとき、その意味は、この指導の全体の歩みとの関連において理解されなければならない。」<sup>(66)</sup>

このようにして、ペスタロッチーは自分の《方法・Uericht》の効果に最大の期待をかけた。たしかに、彼の教育の方法には、明らかに道徳的並びに政治的な意味があった。自主的に思考し、行動する《人格》へと子どもを教育することは、民衆に真の学力を身につかせ近代社会を担う市民を育て人類の幸福を願っていたペスタロッチーの生涯をかけての目標であった。

### 第八の書簡各論、その二、「数」の教授

ペスタロッチーは「われわれの認識の、第三番目の基本的手段は《数》である。」<sup>(67)</sup>と明言している。さて、数の教授はどのようにして行うのか、彼の考えに基づいて考察してみよう。

「《数》は、あらゆる《直観》において、われわれが大小の関係を明瞭に意識し、この無限の大小関係を最も明確な規定にまで還元して表すことが出来るようにするのだ。……

しかし、《音》と《形》とは、非常に、さまざまな形で誤謬と錯覚との萌芽を内在的にもっているが、数については決してそのようなことはあり得ない。数だけは誤りのない結果を導いてくれるのだ。<sup>(68)</sup>

数の認識は、《確実な直観》をかいては無力である。そこで、ペスタロッチーは、数の初歩点の直観から着実に発展する算術の指導を考える。

「算術というのは、いくつかの単位を結合したり、分離したりすることから始まるものに外ならない。その基本形式は、本質的には一たす一は二、二引く一は一と言うことだ。

あらゆる計算の基礎として、事物の実際の数関係の意識が、人間の精神の内部でしっかりと捉えられていなければ、計算の技術は、単なる想像力や記憶力になり下がってしまう。そして、《明晰な概念》に到達するという教育の本質的な目的に対しては、無力なものになってしまう。<sup>(69)</sup>と述べ、さらに《数概念の形成》は、「ひとえに理性の訓練であり、決して単なる暗記仕事やおきまりの手仕事の技巧ではなく、反対に最も明瞭で《明確な直観》の成果であり、純粹に明晰な概念へ、つまり真理へ、子どもたちを導くことができる」と、<sup>(70)</sup>《明確な直観》を強調してペスタロッチーは、第八の書簡を終わっている。

## 六、知識の陶冶 その三・総括（第九・一〇・一一及び一二の書簡）

第九の書簡・総括、その一・歴史的課題

### （二）成果の総括と新たな探究

ペスタロッチーは、第七・八の書簡で、《語》《形》《数》という、認識の基本となる三つの手段と、それらの指導法について説明した。

ここでは、自己の今日までの生涯とその仕事を歴史的に振り返って総括すると共に、《直観》をあらゆる認識の絶対的な基礎とみなすペスタロッチー独自の方法及び関連させながら説明している。

彼は当時のヨーロッパの教育が、本質を一切無視して個々ばらばらの真理の断片の注入に奔走している現状を「ひどく惨めで弱々しく、まるで価値のない、泥土にすぎない」と、きびしく批判している。

親愛なる友よ！ 私はいま、過去を振り返って、「自分は、人間の教育指導の本質ということに対して、本当に、いったい何を実行したのであろうか」と、ペスタロッチーは謙虚に自問し自省し、そして新たな未来への挑戦をしようとしている。

「まず、私は、《直観 (Anschauung)》をあらゆる認識の絶対的な基礎として認めることによって、授業の最高の原理を確立した、ということ。さらに私は、あらゆる個々の教育理論はさておき、教育の理論そのものの本質、および自然そのものによって規定されなければならないところの、人間の形成の基本形式とを、発見しようと努力してきた、ということだ。……私は、いつさいの授業を、三つの（語、形、数）部門における授業の成果を、物理的な必要性にまで高めることができるような、特殊な手段を追求してきたということなのだ。」<sup>(7)</sup>

さらに、彼は続けて次のように指摘している。「私はこれら三つの基本的手段を、相互に調和させることによって、教育指導を多面的に、かつ三つの部門全体が調和するようにしたばかりでなく、それを人間の自然本性と一致させ、かつ、人類の発展における自然の歩みに近づけた、と言うことだ。そして、公的に、全般に、民衆のために行われているヨーロッパの教育制度は、《直観》が授業の最高の原理であることを全然認めていないということだ。」<sup>(8)</sup>ここにヨーロッパ教育制度の大きな欠陥があるのだと鋭く指摘し批判している。



## (二) 印刷術と文字人間

ここでもペスタロッチーは、鋭く《直観の無視》を批判している。

「私は、現在のヨーロッパの教育制度が、人類の形成は、われわれの自然本性の本質によって規定される、という基本形式を承知していないことである。それどころか、一切の教育の本質を、個々バラバラの教授 (Unterricht) (教育指導) の混乱の犠牲にしており、あらゆる種類の真理の断片を聞きかじらせることによって、真理の精神そのものを殺してしまい、この精神を基礎として成り立つ、自主独立のための能力を、人間の内面で絶滅させてしまっている、と言うことを知った。それはまさに、《直観の無視》である。ヨーロッパでは、こうした民衆教育が原因で民衆が精神錯乱に陥らざるを得ず、実際そうなってしまった。」<sup>(74)</sup>

ペスタロッチーは、階層格差が民衆の教育格差を生み出している原因の一つについて次のように述べている。「ヨーロッパでは、一方個々の学術の面は、非常に高いレベルに達しながらも、他方では、全人類に対する自然の導きの一切の基礎を失ってしまった。印刷術の発明が上流階級の優秀さと下層階級の惨めさとの間に人間の精神を頽廃させるような、この不均衡、あるいはヨーロッパの文化の、この驚くべき不均衡を生み出した端緒は、印刷術の発明にある、というのである。言語の認識を容易にする上で印刷術がおよぼした、測り知れないほどの影響力に驚愕しているが、……印刷術がこれほど効果を上げ得たのは、封建制、イエズス会とか、副次的な影響力が必要であった。……印刷術が、ヨーロッパの人々の《五官＝感性》を極度に狭めてしまい、とりわけ直観のための、普遍的な器官である《目》を、新しい認識の神聖な偶像たる《文字》と《書物》とにがちり縛り付けてしまったこと、その結果、印刷術は我々の認識の、一層普遍的な器官である《目》を、単なる文字用の《目》にしてしまい、我々自身を単なる《文字人間》にしてしまった、と言いたくなるほどである。」<sup>(75)</sup>と、指摘し印刷文化の急

速な発達の状況下で、上流階級と下層階級との格差がそれぞれの人間の内面に秘められている《感性の豊かさ》さえも踏みにじっていることを指摘し、感性を通しての認識の大切さを強調している。

### (三) 直観の喪失

直観を喪失した教育方法は、単なる小手先の技巧となり、本来ならば自然に従う術(Kunst)によって子どもたちを《真理》と《知恵》を高めることができたはずの力やメカニズムが、逆に《偽り》と《愚かさ》に陥れる道具となり果ててしまう。こうして人間は「無力にして直観を喪失した、哀れな口先だけの輩」に墮落してしまったのだと、ペスタロッチーは嘆くのである。

「われわれは長い間、根深い人為の術と迷いを助長する根深い手段とによって、認識手段と教育手段とから《直観》を全面的に奪い去られ、さらにわれわれ自身からは、すべての直観能力を奪い取られるような、そんな体制に組み込まれていた。」<sup>(6)</sup>

第九の書簡を終えるのにあたって、ペスタロッチーはヨーロッパの教育の欠陥を次のように指摘している。

「愛する友よ！私は次のような主張に立ち返ろう。

ヨーロッパの教育の欠陥、あるいはむしろ、教育についてのあらゆる自然的な見方の人為的な転倒が、それがヨーロッパを現在のような状況にまで導いたのだ。われわれが現にそうであるところの、また将来もそうであろうと予想されるところの、市民的、道徳的、宗教的な転倒に対しては、表面的で透き間が多く、かつ無計画なわれわれの民衆教育(Volksunterrichtes)の欠陥を抜本的に改め、《直観》がいっさいの認識の絶対的基礎であることを認めること。換言すれば、いかなる認識も直観から出発しなければならず、また直観に還元できなければならぬ

いうことを認めること、これ以外にヨーロッパの破滅をくい止めるいかなる手段も存在しないのだ。」と、ペスタロッチーは鋭く指摘し第九の書簡を閉じている。

### 第一〇の書簡……総括、その二、直観の意義

第一〇の書簡は、第七の書簡から第九の書簡までを総括し、《形》《数》《語》の三領域におけるたんなる直観を、それぞれ、《言語の術》《直観（形）の術》《計算の術》にまで高めることの意義を、重ねて強調している。今日的に言えば、スリー・アールズ (3Rs) である、日常生活のためにも、また学問的活動をするためにも、この三つの能力は必要不可欠の能力である。<sup>(28)</sup> ペスタロッチーの教授理論の総括として、一四の書簡中もっとも重要な部分であると云つてよい。

### (二) 直観と直観の術の区別

ペスタロッチーは、まずあらゆる教授の出発点としての《直観》と、《形》の認識に際しての《直観の術》とは区別されべきであるという指摘から出発して、《直観》をあらゆる教育指導の出発点におくことは《人間の教育》にとつての理論的な意義を強調してゐる。

この点について、第一〇の書簡の冒頭次のように述べている。

「友よ！《教授 (Unterricht) = 授業》の出発点としてこの《直観 (Anschauung)》とあらゆる《形 (Formen)》の関係についての理論である《直観の術 (Anschauungskunst)》とは区別されなくてはならない。教授の三つの基礎手段すべての一般的な基礎としての《直観》は、直観の術にも、また計算の術や言語の術にも先行するものあ

る。もし、直観を、直観の術と區別して、それだけを見るならば、それは単なる外界の対象がわれわれの《感官 Sense Sinn》(感覺器官とその知覚作用)のまゝに、ただ存在するということであり、その印象がわれわれの意識をたんに刺激するというだけのことにすぎない。自然は、この意味での直観でもって一切の教授を始める。みどり児 (Sauglings) は、この自然の教授の恩恵に浴し、母親がそれを与える。しかし、教育の技術は、これまで、この母親の仕事が自然の行う教授と歩調を合わせられるようにするための何事をもしなかった。みずから、みどり児に外界の色々な事柄を指し示す母親の姿、この限りなく美しい光景 (das schönste Schauspiel) を前にしながら、教育の技術は、なんらなすところがなかった。この美しい光景に、それは、民衆のためには何ものをも、結びつけはしなかったのだ。<sup>(79)</sup>

しかし、ペスタロッチーは自然の名もなき草花に、また夕映えの美しさに幼きわが児と共に、感動する母心こそ、愛しきわが児の心の奥底に美しさへの知的な心を、芽生えさせずにはおかなかつた。この母の無心な、自然なふるまいこそが、わが児の心を豊かにするのである。母親のみどり児に対する最も大切な《教育力》なのだ。こうした、無意識のうちの母親の振る舞いこそが、もつとも大切な人間教育の原点なのだ。これこそが、母親のわがみどり児を抱き教える自然の姿なのである。単なる直観を《術》にまで高めるものなのである。「無力で無教養な母親たちが、その腕に抱きかかえたみどり児に対して、花を示し、鳥を示し、家具や道具を示し、さらにこれらのものの唱えたりするとき、たとえ母親自身は気づいていなくとも、自然は彼女を通して、実に多くのことを行っている。自然は子どもに対して、このような仕方で世界を開示する。子どもがその五官を働かせるのだ。」<sup>(80)</sup>この第一〇の書簡について、ペスタロッチーの愛弟子のドゥ・ガン (Roger de Guimps, 1812-1894) は次のようにこの書簡の意図を述べている。

「ペスタロッチーはこのようにして身体的領域や、道徳的領域においても、直接的経験的な《知覚》を唱えるのである。直観的観念は、この知覚から直接結果する観念である。あらゆる記述・説明・定義は、児童に既に獲得されている直観的観念に基礎をもたなければ、児童の精神に対して影響を与えることはないのである」と述べ、子どもの認識における《直観》の重要性を指摘している。

この第一〇の書簡の冒頭、ペスタロッチーは、次のように問題提起をしている。「友よ、教育指導 (Unterricht) の出発点としての《直観 (Anschauung)》と、あらゆる《形 (Formen)》の関係についての理論である《直観の術 (Anschauungskunst)》とは区別されなくてはなりません。」直観は教授の唯一の基礎であり、長い間教育の世界では完全に無視されたものであった。印刷術の発明後、人びとは書物の役割と力をおかしなほど誇張してきた。教授のためには書物以外のものは何も見ず用いなかったのである。

さらに、ペスタロッチーは、親友ゲスナーに呼びかけている。

「母親は、子どもたちを膝に抱きあげる瞬間から、その子を教えるのだ。つまり母親は自然がばらばらに、遠く引き離して、混乱したままの状態で子どもに示している一切のものを、子どもの感覚に近寄せ、そして、直観の働きを、それに伴う認識そのものが、子どもにとって簡単で、楽しく、魅力的であるようにしてやるのである。無力で、無教養な (ungebildet)、なんら指導も援助も受けずに自然に従う母親は、無邪気そのものであって、自分でやっていることが何かということに気づいていないのだ。彼女は教えようなどと考えず、ただ子どもを安心させ、子どもの相手をしてやろうとしているだけなのだ。しかし、それにもかかわらず、母親はいたって純粹素朴な高尚な歩みを、自然が彼女を通じて何を為しているかを知らずに進んでいるのだ。そうして自然は母親を通じて本当に多くのことをなすのだ。自然は子どもに対して、このような仕方では世界を開示するのだ。子どもがその五官を働か

せるように、子どもの注意力や直観能力を早くから発達させるように、自然は取り計らうのだ。」<sup>(82)</sup>  
 さらに続けて、ペスタロッチーはわれわれに無心な母親のわが子に対する秘められたる教育力を次のように語っている。

「いま、もし自然のこの崇高な歩みが利用できたら、……もし、母親たちの心がみどり児に対して盲目的な自然衝動に駆られていることを、自然の仕事を援助することの技術のおかげで、成長してゆく子どもに対し、衝動ではなく自由な理性に従って継続することができるようになったならば、……子どもたちがその本質的な仕事を立派に処理することによって生涯を通じて内心の満足に到達できるように必要とするであろうすべての能力を、それぞれの子どもたちの境遇や環境に結び付けて発達させることが出来るようになったら、われわれ人類を、どのような状況にあるにもせよ人類の一人ひとり、不幸な境遇の多くの困難のなかにあっても、不遇な時期のあらゆる災いの最中にあっても、静かな、落ち着いた満足な生活が出来るようにするために大きな、実に大きな寄与をしてやることがいかに容易になるだろう！」と。<sup>(83)</sup>

(二) 直観を《術》にまで高める

《直観》そのものを《術 (Kunst)》にまで高めるためには、認識の三つの基本的部門である形 (Form)、数 (Zahl)、語 (Wort) のすべてにおいて、子どもの内面に深く認識させることである。教育の技術を評価する場合には、当然、その《術 (Kunst)》の成果が問題にされなくてはならない。

「人類の発展における自然の歩みは、まったく普遍である。……優れた教育方法は二つとない。……正しい教育方法は一つ在るのみである。……私の考えによれば、どんな方法であれ、その方法の内面的な価値の尺度を示す唯

一つの証拠は、『人間らしい能力 (Menschenkraft)』と『母親のような心 (Muttersinn)』が、人間らしい能力と母親のような知恵が育っていないことが、生徒の額から読み取れるようなら、そのような方法は、他にどんな良い点があるとしても、私はそれを非難しないわけにはいかない。……』<sup>83)</sup>

このことは、すでに『隠者の夕暮』において明確に述べていた普遍的な人間陶冶の理想が、ここでも強く主張されていることに注目したい。

### (三) 術 (Kunst) と人間の能力の発達

教育の術が、理想とすることは言葉のすぐれた意味における人間を育成することであった。この理想を達成するためには、『術 (Kunst)』は、自然の永遠の法則に基づくものでなければならなかった。術は、人間を対象として見つめ、たんなる直観から明晰な概念に、至らせるものでなければならなかった。換言すれば、人間の感性的認識を理性的認識にまで高めようとするのがペスタロッチーの考える『術』の目的であり、『術』の本質であった。

彼は人間の諸能力を發展させることと、概念を明晰にすること、これがすべての『術 (Kunst)』の目的であると考えていた。そして、明晰な概念が人間性の本質に及ぼす影響について、ペスタロッチーは、次のように考えていた。

「子どもにとつての明晰な概念というのは、子ども自身の経験によつて十分に明らかであつて、それ以上いくら経験に訴えても、もうそれ以上説明の仕様がなような、そんな概念に限られる。」<sup>84)</sup>

要するに、子どもを『明晰な概念』にまで導くには

(一) どんな能力が、どんな順序で育てられなければならないか。

(二) その能力は、どんな順序で教材を選択し配列することによって得られるのか、

(三) 子どもの直観の成熟度はどうかということ。

この三点からの考察が必要だとペスタロッチーは述べている。

第一は、子どもの認識能力の発達に、

第二は、教材の選択及び配列に、

第三は、子どものレイデネスである。

ペスタロッチーはこのように問題を捉えたうえで、直観を欠く言語叙述の氾濫を現代の病癖であるとして、人間の復権のためには、直観が成熟しておのずから明晰な概念に結実するまでのプロセスを明確にすることが必要である、と考えた。

彼が言うところのプロセスは、

(一) 個々の対象の直観

(二) その対象への命名

(三) 対象の諸属性を記述する能力

(四) 対象の諸属性を明瞭にする能力、もしくはそれを定義する能力

こうした、プロセスを確実に経ることによって、直観は子どもたちの心に深く認識されるのである。

ペスタロッチーは、さらに次のように述べている。

「人間の陶冶が混乱に墜ちいたり、飛躍したり、あるいは皮相のものになったりすることを防ぐことの優れた手段は、我々の認識の本質的な対象の最初の印象と言うものを、子どもたちが始めて、それを直観するとき、子ども



たちの感性に、出来るだけ明確に、正確に、かつ包括的に与えようとする配慮に、主として基づくのだ。《みどり児》がまだ揺り籠にいるころから、我々人類の指導を、盲目的で気まぐれな自然の手から引き離し、われわれが幾千年の経験に基づいて、自然の法則の本質について描きだしたところの、より優れた力の手にし始めなければならぬ。」と、ペスタロッチーは述べている。

### 第一一の書簡：・知育論の総括、(その三) 反省と残された課題

第九・一〇・一一の書簡では直観の意義を中心に知育論を総括している。

第一〇の書簡の最後において、ペスタロッチーは彼の《術 (Kunst)》の探究が成功を収めたことを強調しながら、やがてそれが克服される運命にあることをも述べている。ここでは彼自身の仕事の限界を指摘し、この仕事についての彼自身の評価を下しておきたかったのかもしれない。内省力の強い人であったペスタロッチーの手柄を、あらわしている書簡である。

第一一の書簡の冒頭次のように述べている。

「愛する友よ！ 私がこの前の手紙の最後に述べた言葉は重要なものだ。だから私は今日さらに言わなくてはならない。．．．これまで述べてきた教授の目的のための人為的な指導 (Kunst) は、感性的な自然の歩みを、私の教授の目的に合うように単純化したものにほかならない。しかし、私の目的に叶うもつと優れた手段があり得る。このように洗練された感性的な自然の歩みを高度に完成させること、純粹な悟性の歩み、この目的のための純粹な悟性の陶冶が可能なのだ。直観のなかにあらゆる不確かなものを、きわめて明確な真理にまで高めることが、私の本性 (Natur) にとって可能のことだ。直観そのものを、直観における単に感性的なものの不確かから引き離して、

私の本質の最高の力の作品に、すなわち悟性の作品に高めること、このことは私の本性 (Nature) にとって可能なことだ。

自然の手にある高尚な術 (Art) は、未開人たちの生き生きとした直観の力にただ感性のメカニズムを付加するだけでなくて、理性の力をも付加することができる。このように生き生きとした直観の力をふたたび蘇らせて、しかもそれを人類の最も崇高な教え、まったく誤ることのない真理の教えに、結び付けることが可能なのだ。<sup>(87)</sup>

ペスタロッチーは、まず、自分の方法は感性的な自然の歩みを、教授の目的に叶うように洗練したものであるという。そして、この感性的な自然の歩みの洗練化は、さらに洗練を重ねることによって、純粋な悟性の歩みとなり、人間を真理の認識に至らしめることが可能である、と彼は言うのである。それは、彼の方法 (術) が感性的認識から理性的認識への高まりを可能にする方法である、と言うことを示唆している。

そのことの具体的な事例として、彼は、正方形を直観の理論の基礎として位置づけたことを指摘している。

「愛する友よ！ 私の生涯が価値あるものであるならば、それは次のようなことだ。つまり、私が正方形を直観の理論の基礎にまで高めた、と言うことだ。こう言う直観の理論を、民衆はいまだかつて持ったことがなかったのだ。私は、これによって、我々の認識の基礎に一連の人為的手段を整えた。こうした人為的な手段の系列は、それまで、この認識の基礎に依存する教育方法の手段であるところの《言語》と《数》とだけがもっていたが、認識の基礎そのものには、このような人為的な手段の系列が欠けていた。私は、またこれによって直観と判断、感性のメカニズムと純粋な悟性の歩みとを互いに調和させることが出来た。そして私は、この方法で、種々雑多な個別の真理の錯綜を整理して、教授 (教育方法) を真理に基づくものへと立ち返らせた。」<sup>(88)</sup>

ペスタロッチーは、自分の方法が少なくともその根拠において絶対無謬であるということを確認していた。そ

れは理論や判断以前の、いわば公理のごときものであった。しかし、彼は自然の必然のメカニズムや物理的な認識の機構の法則に教育の術 (Kunst) を基づかせようと言う彼の考え方自体に誤りのないことを主張しているだけであつて、彼が自然の機構の法則など、すべてを知り尽くしたなどと言っているのではない。この点について彼は驚くほど謙虚であり、彼の真摯な人柄が次の「友よ!」の言葉のなかに読み取れる。また、自己の生涯を振り返っている。

「次のように言つてもそれは私の魂の潜越ではない。私は生涯を通じて、私の愛する民衆また私ほど民衆とその悲惨を共にしたものは少ないがゆえに、私ほどその悲惨を実感している者は少ない民衆、この民衆を救ふこと以外には何も望まなかつたし、今も望まないのだ。・・・私は私自身に腹を立てながら、また民衆 (Völk) と私の家族 (Meinigen) との惨めさに絶望しながら、墓に沈んでいったではない。」<sup>(8)</sup>

ペスタロッチーは、自己の生涯を深く自己反省をしつつ、自己の Unterricht (方法) が、少なくともその根本において絶対に無謬のものであるということを確認していた。

ペスタロッチーは、民衆の不幸を救おうという大きな願望を持ちながら、その為に是非とも必要な才能の多くを欠いていた自己自身の無能さを正直に告白し、もし、ブース (Buss) や、クリューズイ (Krius) や、トープラー (Tobler) の協力を得ることがなかったなら、自分の理論がこのように結実することはなかったにちがいないとして、その幸運を次のように、神に感謝している。

「友よ! 今しばらく、自分の行いと目的とを忘れ、私が、自分はまだ生きているのだ、しかも生きているのはもはや私ではないのだ、と私に迫ってくる憂愁の情に身を任せることを許して欲しい。私は一切を失つた。私は自分自身をも失つた。にもかかわらず、主よ (o Herr)、あなたは私の生涯の願望を私の心に保持させて下さつた。

そして、自らに定められた道を踏みはずした幾千もの人々の目的は、彼らと私の目の前で打ち砕いたのに、私の苦悩に充ちた目的は、私の目の前で打ち砕き給わなかった。

主よ！ あなたは私の生涯の事業を、私の破滅の最中 (mitten) ですら、保たしめ、絶望のなかで消え果てようとしている私の老いの日々に、なお夕映えの光を投じ、その美しい輝きで私の生涯の悲しみを癒して下さった。

主よ！ あなたが、私に示された《慈愛 (der Barmherzigkeit)》にも《誠実 (der Treue)》にも値するものではない。

主は、あなただけは踏みにじられたこの虫けらをも、なお哀れられた。あなただけが踏み付けられた葦をも折らなかつた。

主よ、あなただけが、消えかけた灯心を消してしまわれなかつた。そして、あなたは私が死に至るまで、私が幼少のころから、世の中から見捨てられた人々のために献げようとしながらも、ついに献げることができなかった犠牲から、眼差しをそらさなかつた。<sup>(9)</sup>

ペスタロッチーは、このように自分が歩まなければならなかつた苦難に充ちた生涯を顧みて、彼はただ自己のいたらなさ、罪の深さを反省し、神の救いの偉大さに頭を垂れるのだった。

以上で、本書の主要部分は終わるが、しかし、彼は《知育論》のみでもって本書を終わることはしなかつた。《知ることの指導》(知識の陶冶) について考えたが、次には、《為すことの指導》(技術の陶冶) について考えなければならなかつた。《為すこと》とは、具体的には、《働くこと》(仕事をすること) と《徳の実践》である。第一の二の書簡では、技術の教育を扱い、第一三・一四の書簡では、道徳・宗教の教育について論究している。

第一二の書簡く補講

(二) 知識と技能の問題

ペスタロッチーは、彼の論究の原点に立ち戻って、次のような設問を設定している。

「私は、私の問題の経験的な探究において、何ら既成の学説からは出発しなかった。私はそのようなものは何も知らなかった。私はただ単純に自問した。一人ひとりの子どもたちが、それぞれの最も大切な事柄を立派に果すことによって、内心の満足を味わうことが出来るようになるために、どうしても必要な《知識 (Kenntnisse) と技能 (Fertigkeiten)》とを、あますことなく身につけさせるためには、どんなことをすればよいか。」<sup>(2)</sup>

これが彼の設問であった。ペスタロッチーは、これまで子どもに対する知識の陶冶にふれただけで、技能の陶冶については、十分に触れていなかった。こうしてみると知識の陶冶について答えただけでは十分でないことが明らかであった。感性的な存在としての人間は、さまざまな必要や欲求をもっており、これを充足しなければ内心の満足に到達できない。だから人間は自己の自然本性の必要や欲求を知るだけでなく、これを充たす実践行為に習熟しなくてはならないのである。そして、ペスタロッチーによれば、このような《技能の陶冶》もまた、知識の陶冶と同じく人間の自然のメカニズムの法則に従って進められなければならない。こうしてこの重要な技能の陶冶が、やはり民衆には与えられていない。

しかし、人間が内心の満足に達するために身につけなければならない技能は、何か。《技能を欠く知識》こそ単なる知識の注入であり、《知は生きる力》になり得ない。

ペスタロッチーは、当時のヨーロッパ社会における教育制度 (Unterrichtswesen) の大きな欠陥について、こう指摘している。

「技能を欠いた知識こそ」こそ、おそらく悪魔がこの時代に贈った最も恐るべき贈り物だ」と、そしてベスタロッチャーは言う。

「感性的な人間よ (Sinnenmensch) ! あなたは多くのものを必要とし、あらゆるものを欲求する存在だ。これを満たさなくてはならない。それゆえ、感性的人間は、何を、いかにして求めべきかを知らなければならない、また考えなければならない。そればかりではなく、その欲求や必要を満たすための実行行為が出来なくてはならない。思考 (Denken) ・知識と行動 (Handeln) ・技能は、ちょうど小川 (Bach) と泉 (Quelle) とのようになり、また、車の両輪のようなものである。」と、理論と実践の統一の必要性を述べている。

## (二) 技能陶冶の欠如・・(生きる力の教育の欠如)

「民衆にとっては、この内心の満足に達する為に必要な技能の教育が与えられていない。人殺し(戦争)の為の技能は別として、この彼らにとって必要な技能のための公的陶冶をまったく受けていない。」<sup>(93)</sup>

と、ベスタロッチャーは指摘し、公的陶冶が実施されていたならば、民衆の幸福にとってどんなに役立ったことであらうかと、彼は嘆いている。

しかし、政治にこれを期待することは出来ない。

「寡婦や孤児からパンを奪いさるる様に、閨閥主義の為に、民衆に宗教上の賦課を課し、民権否定のためには世俗的賦課を課し、両者ともに公共の幸福、つまり、一方は魂の救済 (Seelenheil)、他方は現世の幸福 (zeitliches Glück) のために、公共の幸福 (öffentliche Wohl) と同じくことを看板にしたのだ。実際には、両者は民衆の魂の救済にも、現世の幸福にも、本質的に反対の結果を生んだのだ。」<sup>(94)</sup>

「さらに、「民衆を救うべき立場にある政治家たちは、民衆の幸福について考えるどころか、全く正反対のことをやっている。厩に居るとき、犬や猫のそばに居るとき、彼らの多くは人間らしくふるまっているが、しかし、民衆に対して、彼らは人間的に接していない。民衆に対して彼らの多くは、人間では在りえない。彼らは、民衆に対する温かい心と言うものを全く持ち合わせていないのだ。」<sup>55)</sup>

ペスタロッチーは、こんなにまで親心を失っている当時の政治家を厳しく批判している。彼は、民衆の生活権を保障する《技能の陶冶》について全く考慮しないまま、民衆からの収奪のみを考えている政治的権力の反人間性に我慢が出来なかったのである。

われわれは、ここにペスタロッチーの当時の政治的状況に対する洞察の鋭さ、問題把握の的確さをみることができる。

### (三) 技能のABC…基礎陶冶の指摘

技能を熟達させるための陶冶は、技能のABCに基づかせなくてはならない。単純な技能から、最も複雑な技能へと、しかも確実に、進歩を遂げさせるような訓練の方法が工夫されなければならない。ところが、これまで、この技能のABCは求められもしなかったし、発見されてもいなかった。この点について、ペスタロッチーは次のように述べている。

「技能のABCが、最も複雑な人間の技能の根本までも含む身体能力の最も単純な表現から出発しなければならぬ、ということは極めて明らかなことである。

打つ、担う、投げる、突く、引く、回す、ねじる、振る、というようなことは、われわれの身体能力の最も良く眼に

つく単純な表現です。これらの動作は、本質的に違っていても、しかし、どれも共通に、それぞれが独自に、人間の職業の基礎となると考えられるすべての技能の基本を含みこんでいる。だから、技能のABCが、技能一般についての、早期からの心理学的に整えられた訓練から出発しなければならないということは明らかだ。<sup>56)</sup>

しかし、現実にはこのような技能の訓練を当時の学校教育に期待することは、期待できないということを、ペスタロッチーは認めないわけにはゆかなかった。

当時の学校は、すべて「綴り字学校」「書方学校」「書物学校」「協議問答学校」で、それも上流階級のための学校であって、庶民のための《人間教育のための学校》ではなかった。

しかし、それにしても技能のABCは求められなければならない。

そこで、ペスタロッチーはその在り方を模索するのである。

「技能のメカニズム (der Mechanismus der Fertigkeiten) と認識のメカニズム (mit dem Mechanismus) と完全に同じ歩みをすると考えていた。」<sup>57)</sup>

しかも技能の学習は、認識の学習に比較して、その性質上、より積極的、自己活動的であるから、それぞれの子どもの性格や置かれている社会的状況(家庭)によって、その子どもの身につける技能の特性やその用い方を決めることになるのである。

#### (四) 徳の感性的基礎としての技能・・・ペスタロッチーの基本的考え方

ペスタロッチーは、ここで技能の陶冶について次のような重要な指摘を行っている。

「認識能力の育成は、直観のABCから出発して、子どもを明晰な概念へ、さらにその言語的表現である定義



へと子どもを導くと言う仕方で行われた。《技能の陶冶》もこれと同様に、指導のABCから出発して「われわれ人類の生活上の諸義務（知と徳）が要求している諸能力や諸技能の感性的な完成、不動の習熟へ、つまり《徳》にまで」子どもを導かねばならぬ」と。要するに、ここが重要であるが、ペスタロッチーは技能のABCは、技能の完成へ、基準の体得へ、つまり《徳の習熟》へと子どもたちを導くことの大切さを主張している。

ペスタロッチーの道德教育の基本的考え方を次のように示している。

《知的陶冶》において、定義を《直観》に先行させてはいけなかったのと同様に、《道德的陶冶》においても、《徳の説明》を《徳の習熟》に先行させてはならないのだ。《技能》は徳の感性的基礎であると、述べている。この考え方は道德教育において道德的知識を先に教えるのではなく、具体的な事例を通して子どもたちの心情に訴えることの必要性を説いているのである。

こうして彼は、「子どもが彼の使命の本質と言う不動の見地になつても、また彼の境遇や関係という可動の見地に立つても、彼の人生の経路において、必然や義務が彼に課することを、苦もなくやり遂げるような能力を身につけるように、できればそれを第二の天性とするように導くことは、いかにして可能であるか？」<sup>(98)</sup>

と言う問題である。もっと具体的に言うならば、子どもを未来の有徳な父・母に育て上げるにはどうしたらよいかと言う問題に答えるための糸口を示したのである。それが新しい産業社会の求める多様な技能や技術を下層階級の貧しい子どもたちに身につけさせ、その生活を安定させてやるための配慮から生まれたものであることは言うまでもない。ペスタロッチーは安定した《所有》こそが「人間の道德の本来の源泉」であると考えていた。

しかし、「愛する友よ！ この解決の詳細に今ここで立ち入ることは出来ない。別な機会にそれを残して置こう。」<sup>(10)</sup>と述べ、第一二の書簡を終わっている。

後の機会とは、ペスタロッチーの技能陶冶論の部分的展開として、一八〇七年の『体育論』で結実している。

## 七、『道徳性・宗教性の陶冶』

第一三・一四の二つの書簡は、最も重要な部分である。この二つの書簡は人間における道徳性と宗教性の発達とその育成を取り扱っている。まず第一三の書簡から見て行くことにする。

### 第一三の書簡・・・道徳と宗教の教育

子どもの道徳および宗教の教育を論じ、ペスタロッチー自身『彼の全教育体系の要石』と呼んでいる部分である。

「友よ！ 私は人生の最も本質的な諸技能を得させるための陶冶が依拠する原理や法則の詳細な点に、このところやや深く入り込みすぎたかも知れない。それに引き換え、私は私の思想の全体系における《要石》にふれずに、この書簡を終わるつもりはない。」と述べ、この書簡を重要性を強調している。

ペスタロッチーは、この書簡では《知育》について時間をとりすぎたが、彼にとつて最も重要なのは、「子どもたちに道徳及び宗教の教育をどうするかが最も大切な課題であった。」まずペスタロッチーは、神とは、神の概念、神への帰依の心が、どのようにして私たち人間の心に生起するのかを考えた。そして、神への愛、信頼、感謝の心、神に対する心より、まず、人間への愛、信頼、感謝の心、及び人間に対する従順の心が育って行かなければならないのだという。それらはどのようにして人間の本性のなかに育つのであろうか。これが、彼の最大の課題であった。

(二) ペスタロッチーの課題・・・道徳及び宗教の教育

ペスタロッチーは自問している。

「人類の発展に関して、私が一般に真実だと認めた諸原理と、『敬神』の本質とは、どのように関連しているのでしょうか。」と自問している。さらに、「私は唯一の神を信じるということ、また私が『神を愛し』『神を信頼し』『神に感謝し』『神に従う』とき、自らを神の腕に委ねて、自分が幸せだと感じるということ、このようなことはどうしておこるのだろうか」と。<sup>(註)</sup>

また、ペスタロッチーは宗教観を次のように捉えている。

「愛と信頼と感謝との感情、ならびに従順の能力は、私が神に対して、それらを捧げることが出来る以前に、『私自身の中に』発達していなければならない、ということに私は気づくのだ。」<sup>(註)</sup>

そして、彼は道徳および宗教の教育の本質的基礎が、乳・幼児期における『母とその子』と相互関係に見出されると述べ、この時期における母の愛情の深さによって、幼な児の心の奥底に愛と信頼と感謝との感情が、さらに従順の心が自然に芽生え育まれていくのである。ペスタロッチーは、さらに次のように自問自答している。

「私はどのようにして人間を愛し、人間を信頼し、人間に感謝し、人間に従順になるのであるのか? ……人間に対する愛、人間に対する感謝、そして人間に対する信頼が本質的に基礎をおいている『感情』、ならびに人間に対する従順が形成されるきっかけとなる『技能』とは、どのようにして私の本性の中に (in meine Natur) 生じてくるのか?、と。…そして、私はそれらが主として、『幼な児と母』との関係から生じてくることを知った。」<sup>(註)</sup>

「母はわが子を養育し、守り、喜ばせずにはおられない。母親は、全く感性的な本能の力に駆り立てられてそうするのだ。…こうして、子どもの心の中に『愛の萌芽 (der Keim der Liebe)』が成長してゆく。…今まで

見たこともない対象物が目の前に現れると、子どもはびっくりし、怖がって泣き出す。母親は子どもを胸にしつかりと抱きしめ、あやしてやり、気をまぎらしてやって、泣き止ませる。……子どもは母親のほほ笑みに、明るい澄み切った目で応える。……こうして《信頼の萌芽 (der Keim des Vertrauens)》が、子どもの中の心に発育してくるのだ。<sup>(16)</sup>」

こうして、「愛と信頼と感謝との萌芽は、間もなく膨らんでくる。子どもは母親の足音を聞き分けるようになり、母親の後ろ姿にもほほ笑むようになる。……母親にとって愛らしい者は、子どもにとっても愛らしいものとなり、母親が胸に抱くものを子どももまた抱き締める。母親が接吻する者に、子どもも接吻する。こうして《人間愛の萌芽》が、自然に子どもの心の内に発育する。<sup>(17)</sup>」

ペスタロッチーは、人間の信仰心・宗教心は幼な児と母親との間の関係から生まれるものであると、説く。母親は、その本能によって幼な児の自然本性の欲求を充たしてやり、幼な児を胸に抱いてその恐怖を静めてやることの出来る存在なのである。こうして幼な児は母親を愛し、信頼することを通して、母親の愛するものを愛し、母親が信頼するものを信頼するようになるのである。このプロセスはいわば感性的な自然の本性の傾向そのものであると言ってよい。

しかし、ペスタロッチーによれば、母親に対する《従順》の能力は、「感性的自然の最初の傾向とは相反するもの」であり、従って《術》による教育が必要とされる。自然は、暴れる子どもに対して、いくら暴れても無駄だということを経らせる。子どもは、木や石を叩く。自然はびくともしない。そこで子どもは、木や石を叩くをやめる。次に、母親が子どもの欲しいままの欲望に対して、がんとして応じず。子どもは暴れたり叫んだりする。母親はそれでもびくともしない。子どもは泣き叫ぶのを止める。子どもは、だんだんに母親の意志に自分の意志を従わ

せることができるようになる。こうして、《忍耐の最初の芽》が、《従順の最初の芽》が、こうして育っていくのだ。従順と愛、感謝と信頼とが結合されると、《良心の最初の芽》が、成長してくる。すなわち、愛する母に逆らって荒れ狂うことは正しくないことだ、と言う感情の薄い影が……また、母は自分のためにのみ存在するのではないのだ、と言う感情の薄い影が、また万物は自分の為のみ、この世に存在するのではないのだ。と言う感情の最初の影が育ってくるのだ。そして、これと共に、子ども自身もまた、自分のためだけにこの世があるのではないという第二の感情が芽生えてくる。……これこそ《義務》と《権利》についての最初の影の発芽なのだ。」<sup>⑩</sup>

以上が、ペスタロッチーは、幼な児と母親との間の自然の關係から生まれるところの《自我の発達》（＝道德的自我の発達）の最初の根本特徴であるという。さらに、信仰によって神に帰依する一切の感情の芽というものは、その本質において、母親に対する幼な児の帰依を生み出すところの芽と全く同じものなのだと言うのである。

こうして、聡明な母親の本能の力によって、幼な児の内面に神に対する信仰心や畏敬の念が芽生え、愛と信頼の心が育まれるのである。

## （二）《術》（教育）の課題

この《信頼》と《従順》の芽は、幼な児が成長・発達して子ども自身に生きる力がついてくると、たちまち萎縮してしまうおそれがある。子どもが自分自身の力で自分の欲求を充たすだけの力を持つようになると、子どもの心の中に母親の存在が薄れて行き、母親がいなくともやって行けるといふ密かな自信が生じてくるのである。子ども自身の生きる力の目覚めを神への信仰につなぎとめることに失敗したら、せっかく芽生えてきた《愛と信頼》の心情も信仰心も、いつさい失われ、子どもはただ欲望を充たすため感覚的な快楽や、力だけにあこがれる放蕩者に

なってしまう危険性がある。

そこで、成長してきた子どもにとっては、母親は以前の母親ではなくなり、子どもが外界の新しい刺激に魅力を感じ始めるとき、人々は《術》（教育）の力によって、子どもに芽生えている《感謝》と《愛と信頼》と《従順》の心情を純粹に保つように心がけなければならない。この心情のなかにこそ神は宿り、この心情こそ私たちの道徳生活を支えるのである。

「人類よ！ これらの感情が子どもの心のなかに芽生えさせた自然の根源が、枯渇しようとするとき（その働きをとめようとするとき）、あなたの《術》はあらゆる手段を尽くして、その根源を新たに生き返らせる手段を講ずるために全力をつくさなければならぬのだ。・・・あなたは、こうした時になったらもう子どもを自然に任せず、むしろ子どもの指導を盲目の自然から引き離して、幾千年の経験が人類に与えてくれたいろいろの原理や力の手にそれを委ねるように、あらゆる努力を尽くさなければならぬのだ。」<sup>(10)</sup>

つまり、子どもの目にうつる世界、子どもを刺激する外界はそれはそのままでは神の創り給うた美しい世界を子どもに感得させることのできるようなものではない。父母ともに仕事の追われ忙しく、子どもの生活に目がやれない。かりに恵まれた生活が許されたとしても、そこには常に悪徳への誘いがあるのだ。哀れな子どもたちは、この外界の強力な印象に捉えられて、せつかくの道徳性や宗教心への芽を失い、自滅の道をたどることになりかねないのだ。

人類のこうした墮落を防ぐための《術》の課題は、「神がわれわれの自然本性のうちに授けた、われわれの知的、精神的向上と道徳的向上との統一手段」を念入りに育てることであり、さらに言えば、「教授と教育とを、一方では自然的メカニズムの法則と調和させ、他方ではわれわれの内的自然の感情と調和させるような、そんな根本原則

に、われわれ人類の教育を従わせること」であるといえる。<sup>(10)</sup>

この目的のために、われわれは、われわれの精神と感情の発達について、その連続的な漸進的な過程を見出す必要がある。この連続的過程について、ペスタロッチーは次のように考えている。

連続性の第一の法則は、感性的な諸力の発達である。つまり、子どもの最初の教育は、頭脳の仕事でもなく、理性の仕事でもない。それは全く感性的の仕事であり、心情の仕事であり、母の仕事である、と言うことだ。

第二の法則は、感性的な諸力の道徳性への従属である。人間の教育 (Unterricht) は、感性の訓練から判断の訓練へと、進んで行くものであり、それは、理性の仕事になり始める以前に長い間、心情のしごとであり続けるものだ、と言うことだ。

ペスタロッチーは、連続性のための原則として、先に述べているように、二つの条件を挙げている。

(一) 子どもにとつて最初の教育 (Unterricht) は、けつして頭や理性の仕事ではなく、常に感覚の仕事であり、心情の仕事である。つまり、母の仕事である。

(二) 人間の教育 (Unterricht) は、感覚の訓練から判断の訓練へと進む。それは理性の仕事となる以前に、長い間心情の仕事であり続ける。男性の仕事となり始める以前に、長い間女性の仕事で有り続けるのである。<sup>(11)</sup>

すでに、見てきたところからも明らかのように、ペスタロッチーにとつて道徳性や宗教性への陶冶は、人間の心情に関わるものである。しかし、それは感性的な基礎を欠いては成立することができない。そして、さらに人間の《知性の陶冶》が、《心情の陶冶》から遊離してはならない。この両者の《統合》のうちに、真の《人間の教育》は行われなくてはならない。

この課題の重要性と、困難さのゆえに、ペスタロッチーはさらに、第一四の書簡において追求している。

第一四の書簡……、道徳と宗教の教育の問題

ペスタロッチーは、前の書簡を受けてこれを補足しつつ、かれの信仰観、道徳と宗教教育の問題について述べ、一四通の書簡を締め括っている。『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』の最後の第一四の書簡は、この書の最も重要な部分である。

ここで彼は、人間における神への愛、信仰、感謝、従順などの心が、もっぱら自然の本性にしたがって幼子と母親との関係から生ずることを指摘する。こうして、母の存在と、家庭と、そこで自然的に育つ感性的な諸力と心情、および、それらがやがて真の理性と道徳性との基礎となると言うことを強調するのである。

この第一四の書簡では、道徳・宗教教育の本質的あり方をこの書の総括として述べている。

「友よ、私はさらに進んで自問する。《私の生涯を通じて、私が打ち当たった悪に対抗するために、宗教的な立場から果たして私は何をしてきたか》と。……友よ！もし私の方法がこの点で、人類の要求を満足させるものであるならば、この方法の価値は、わたくしが、この方法に抱いていた希望をさえも凌ぐほどのものなのだ。そして、事実私の方法はその要求を満たすものだった。」<sup>(iii)</sup>

ペスタロッチーは、人間教育を《信仰と愛》によって、《知的陶冶と心情陶冶》さらに《精神と心情》との調和を同時代の人々の心に育むことによつて、実現しようと考えていた。彼は、さらに次のように論究している。

「《信仰心》と《道徳心》との本質をなすところの感情があらわれてくる《芽》というものは、私の教授法の本質が、湧き出てくる芽と、まったく同じものだ。それは、ひとえに幼な子と母親との間に生じる自然の関係から発芽し、乳幼児期から教授をこの自然の關係に結び付け、教授を永遠的な技術によつて、私たち人類の創造主に対する帰依が依拠している情調と同じ情調の上に打ち立てようとする《術(Kunst)》に、本質的に基礎をおいている。



この《術》は、母と子の間の自然的関係が消滅し始める時に、この母親と子どもとの関係から生じてきた高尚な感情の芽がだめになってしまわないようにと全力を注ぐのである。<sup>(15)</sup>

さらにベスタロッチーは、言う。「信仰心と道徳心の本質をなす感情が現れてくる《芽》は、私の教授法の本質が発展してくる《芽》と、全く同一のものである。その《芽》はひとえに、幼な子と母親との間に生まれる自然の関係から発芽し、子どもの時から教授をこの自然の關係に結び付け、私たち人類の創造主に対する帰依が依拠している情緒のうえにうち立てようとする《術》に、根本的には基礎を置いている。私の方法の本質は、母親と子どもとの關係の自然的絆が消滅していく際に、子どもにその母親を返してやるばかりではなく、母の手に一連の知恵を与えてやることである。・・・私の方法は、心から子どもを愛しているどんな母親に対しても、子どもが愛や神から引き離され、子どもの心の奥底で、子ども自身の最も恐ろしい荒廃と、避け難いわがままとに子どもが身を委ねてしまふような危険のある最も危機的な時期に、子どもを守ってやるばかりではなく、子どもの心が、この世界のあらゆる虚偽と欺瞞とによって、無邪気さや真理や愛の印象にたいして全くそこなわれて仕舞う前に、母親の愛の手と純粹に維持された高尚な感情とをもって、子どもを神のよりよき創造の中に導き入れてやる事が容易にできるようにしたいのだ。

私の方法を会得した母親にとつては、彼女の才能や環境の惨めな状況は、もはや彼女の子どもの能力がしぼられる状況ではなくるのである。・・・子どもが母親を通して眺めるすべてのものについて、彼女が最も純粹な愛をもって話してあげられるようにする。母親は胸に抱いたわが子に、神の名を回らぬ舌で言えるようにしてやったが、今度は昇る太陽に、ささやく小川に、木々の木の葉の中に、花の輝きに、朝露のしたたりに、無限の慈悲者である神のおられることを子どもに示してやる。母親は子ども自身の中に、その目の輝きに、子どもの言葉の音色の

中に、神がいたまうことを子どもに示してやるのだ。一切のもののうちに、母親は子どもに神を示すのだ。そして、神を見出すところで、子どもの心は高まり、子どもが世界のなかで神を見るところでは、子どもはその世界を愛するようになる。神の世界に対する喜びが、子どもの心の中で、神に対する喜びと結び合わされ、子どもは神と世界と母とを同一の感情をもって抱き締めるのだ。こうして引き裂かれた《絆》は再び結び付けられるのだ。子どもは今や、母親の胸に抱かれていた頃にもまして、母親を愛するようになる。子どもは今や一段と高い段階に立っているのだ。」<sup>(13)</sup>

「子どもは、誕生の日から母親のやさしい愛情のなかに抱かれて育っていれば、自然と子どもの胸中には、新しい感情が芽生えてくる。ここに子どもの知的発達と道徳的発育を結合する第一歩が開かれるのだ。この第一歩は母親の手によって開始される。子どもは学び、子どもは、さらにいつそう知ろうとする。子どもは母親をせきたてて、一緒に学ぼうとするのだ。母親は子どもと共に学び二人とも日ごとに知識においても、力においても、そして愛においても向上していくのだ。」<sup>(14)</sup>

さらに、ペスタロッチーは続ける。

「友よ！ 私はこの《方法》によって、子どもをその母に結び付け、子どもが母親の心情の影響を永続的に受けられるようにした。この《方法》によって私は、神への帰依を人間の自然本性と結合させ、また我々の心に信仰心を芽生えさせる感情を活性化することによって、神への帰依を確実に支えてきた。母親と創造主、母親と支え主とは、方法によって子どもにとっては、まったく同じひとつの感情となるのだ。私の方法によって、子どもは末永く母の子どもであり、子どもは末永く神の子どもでもあるのだ。子どもの精神 (Geist) と心情 (Herzen) の統一的な発展の段階は、それが最初に芽生えてきた純粋な最初の点 (母との出会い) に末永く立脚し続けるのだ。子ども

もの人間愛と知恵との道は、のびのびと気高く拓かれるのだ。私は、方法によって、貧しいものたちの父となり、悩めるものたちの支えなるのだ。私の母は健康な子どもはほうっておいて、もっぱら病気の子どもにかかりきりになり、惨めな子どもには二倍も心を配ってやっていたのだ。母親は母親であるがゆえに、また子どもたちにとつては、神の代理者であるがゆえに、そのようにせざるを得なかつた。これと同じように、私（ベスタロッチャー）もそうしなければならぬのだ。私にとつて母が神の代理者であり、母の感情と同じような感情が私に迫ってくるのだ。人類は私の兄弟であり、私の愛は全人類を抱くのだ。私は悲惨な人々に寄り添い、そういう人々に対して二倍も父となつてやるのだ。神のように行爲することが、私の天性（meine Natur）になるのだ。私は神の子であり（ich bin ein Kind Gottes）、私は私の母を信じている。母の心情（Herz）が、私に神を示してくれたのだ。神は私の母の神であり（Gott ist der Gott meiner Mutter）、神は私の心情の神であり、母の心情の神なのだ。私は他のいかなる神をも知らない（ich kenne keinen Gott）。私は私の心情以外にいかなる神も知らないのだ（ich kenne keinen Gott, als den Gott meines Herzens）。私は、ただ私の心情の神を信ずるときのみ、自分がひとりの人間であることを感じるのだ。私の心情の神は、私の神であり、私はこの神の愛のうちで自らを醇化するのだ」。

「母よ！ 母よ！ あなたは私に命令するとき、神を私に示してくれた。私が神を忘れていたときには、私はあなたを忘れていた。そして、私が神を愛するとき、私はあなたの幼な子に対してあなたの身代わりになるのだ。私はあなたのかわいそうな子どもに寄り添い、あなたの泣き悲しむ子どもは、母親の腕に抱かれているように、私の腕に抱かれて安らうのだ。母よ！ 母よ！ 私があなたを愛するとき、私は神を愛する。そして、私の果たすべき義務が私にとつて最高の善となるのだ。私があなたを忘れるとき、私は神を忘れ、獅子のよ

うにただ自分のためにのみ生き、自分の楽しみとして、自分のためにのみ、人類に逆らって自分の持てる全ての力をもちいるのだ。その時には、私の魂はもはや父親らしいところはまるでなくなり、私の従順を神聖にするところの神的な感覚も無くなって、私のみかけばかりの義務感、人をあざむく仮像となるのだ。母よ！ 母よ！ 私があなたを愛するとき、私は神を愛する。そして、母と従順、神と義務とは、私にとってまったく同一のものになるのだ。・・・私はもはや自分のために生きるのではなく、私の同胞、私の神の子どもたちの群れのなかに、自己を埋没させて生きるのだ。」

ペスタロッチーの宗教教育の方法は、母と子の自然の結び付きが失われようとするときに、この自然の結び付きから生まれた、母に対する信頼の感情を持続させ、現実の世界が子どもに与える感覚的印象を、常にこの感情と結び付けることによって《純化》し、《母への信頼感を神への信仰にまで高める》ための方法であった。子どもへの指導が、この目的のために行われる時、子どもは確実に信仰心も道徳心も深まり向上するのである。

彼は、母親と子どもとの信頼の絆こそ、人間形成の根本だと考えているが、母親と子の間の自然的関係を持続させる《術》の発展に力を注いでいるのである。

「友よ！ 心からほとばしり出る確信を表現しようとするとき、言葉はいったい何だろう？・・・《神は単なる知識によっては認識されえない。真実の神は唯信仰に対して、子どもらしい無邪気な信仰に対してのみ生きていく。》

《聡明な人の知力さえ、理解することのできないものを、子どもらしい心情は、無邪気に感得する》

このようにして、ただ心情 (das Herz) のみが神を知る。自己を超越した心情みが、……人類を抱擁する。この純粹な人間的性情は、みずからの愛、服従、信頼、祈りの対象として、人格化された最高の原像を、すなわち、全精神界の魂 (die Seele der ganzen Geistergemeine) であるところの最初の聖なる意志を要求し、創造する。……善良な人々は、やがて、彼の母の胸に還って行くようにして、憧憬と愛を抱いて神に還ってゆく。」<sup>(註)</sup>

最後の言葉の中に、ペスタロッチーが生涯をかけて言わんとすることが、明瞭に明らかにされているのである。《自我の為ではなく……、人類のために……、彼の墓碑銘にあるように《すべてを、他者のために為し、己がためには、なにもものも……、Alles für andere, für sich Nichts》である。それを、第一四の書簡の最後に次のように述べている。ここに人類の教育者と言われる最大の理由があることを、われわれは、深く心に刻む必要がある。

「それでは善人 (Guten) が、神について抱く確信は、何処から来るのか? ……それは、理性からではなく、いかなる言葉によっても、いや、いかなる概念によっても把握することはできない。あの説明しがたい衝動、すなわち彼の存在を、より高潔な不滅の全存在の中で美化し (verklaren)、永遠化しようとする (zu verewigen)、あの衝動からくるのである。……(つまり) 私の為ではなく、同時代を生きる人々 (Brüdern) のために、……私の自我のためではなく (Nicht der eigenen Ichheit)、人類のために……これが人間の心の奥底における神的な声の無制的な宣言であり、これを聞き分け、これに従うところに《人間本性の唯一の尊厳があるのであるのだ。(der einzige Adel der menschlichen Natur)》と<sup>(註)</sup>述べ、第一四の書簡を閉じている。

ペスタロッチーの教育方法の特色は、個々の能力の完成を連続的に積み重ねて個人の完成に至らしめることにある。だからペスタロッチーは、この方法が宗教教育という点においても優れたものであることを確信している。そして、彼は、この方法が単に個人を完成にいたらしめるだけではなくて、人間は彼一人のためにだけこの世

にあるのではない。人間は、同時代に生きる人々と共に人間的完成をめざして生きるのだと主張するのである。

さらに、「私の方法によて、幼子は末永く母の子どもであり、神の子どもでもあるのだ。」と、自信に充ちたかれの言葉であり、それは同時に、ペスタロッチー自身の《術(教育指導・メトデー)》にかける必死の願いでもあり、祈りでもあった。こうして幼子は、母を通して神を知り、神を知ることによって同胞を知り、同胞を知ることによって、同胞のために生きること、同胞の純化(die Veredlung)を助けることによって、とりわけ恵まれぬ人々のために生きる己の義務を知るのである。理性においてではなく、心情において神をみ、神の声を聞くのである。ペスタロッチーが言うように、そこに「崇高に生きること("göttlich zu leben")」が、子どもたちの本性となるのである。母は子どもに神を示し、子どもは素直に神を見いだす。このようにして愛と義務は人間にとって同一のものとなる。神を愛すれば愛するほど、ひとはますます自分自身のことを忘れ、人間の本性はいよいよ《崇高な存在("ein göttliches Wesen")》となるのだと言うのである。<sup>(18)</sup>

ケーテ・ジルバーは、この点について「ペスタロッチーは彼のメトデー(方法)のなかで《敬神と人間の本性を結び付けた》と、宗教は『ゲルトルートはいかにして』においても人間的人道主義的な宗教(eine menschliche humanistische Religion)である。」と指摘しているように、ペスタロッチーは「神は私自身の心情の神であり、私の頭脳の神は幻想である。超越的な神や歴史上の啓示(Offenbarung)は論外である。」と述べている。<sup>(19)</sup> こうして人間の尊厳の根拠を信仰と道徳の統一に求めたのである。彼の探求した方法は、この意味において人間の尊厳を確立する《術Ⅱ方法》出なければならなかった。そして、苦闘の思考の結果として、《道徳Ⅱ宗教教育は人間の醇化であり、自己自身のうちにある永遠なものの実現である》に至ったのである。

## おわりに

最後に、この書においてペスタロッチーは何を意図したのか、本書の目的について、あらためて確認しておきたい。彼は、すでに第七の書簡のなかではつきりと本書の意図を語っている。

「私が目指したものは、世の人々に技術とか学問とかを教えようとしたのでもなければ、教えようとしたのでもなかった。《私はそのようなものは知らないのだ》ただ私は、あらゆる技術やあらゆる学問の初歩の学習を民衆一般にとつて、もつと容易なものにすること、また国内の貧しい人々や無力な人々の、顧みられず、育てられずもせず打ち棄てられてきた能力に、教育の技術を適用すること、つまり、彼らが人間らしい人間になるための途を拓くことを強く望んできたのだ。そして、出来ることなら、ヨーロッパの下層市民を、およそ有意義な技術の基礎である自律的な能力では南方や北方の野蛮人よりもずっと立ち遅れさせている逆茂木に火をつけたのだ。というのは、この逆茂木こそ今好評の全ての人を啓蒙するという大ぼらが吹き立てられているさなかで、一人の人間の利益のために一〇名の間人を社会的人間の権利から、教育を受ける権利から、あるいは少なくともこの権利を使用する可能性から締め出しているからだ。願わくは、この逆茂木が私の死後、炎炎たる炎に包まれて燃え上がりますように！ 今の私の仕事は、ただ弱い炭火に湿った、濡れた藁の上に置いた程度にすぎないということを私はよく承知している。しかし私には風が見える。それに風は、もうそんなに遠くない。風は炭火を吹き起こし、私のまわりの濡れた藁は、だんだんに乾き、熱くなり、やがて火がつき、そして燃え上がるのだ。ゲスナーよ！ 私のまわりが、いまどんなに湿つていようとも、燃え上がるのだ。きつと、燃えるのだ。」<sup>(註)</sup>このように、一般民衆教育の改革に対するペスタロッチーの情熱は、かれ自身のうちで燃え上がったのである。

ドウ・ガンによれば、この書について、最も秀れたペスタロッツチーの伝記の作者、彼の事業と理念とを最もよく研究し理解した人の一人、モルフが加えた批評をここに掲げよう。「それは総ての彼の教育学的著書の中で最も深遠なものである。当時において限りなく重要であっただけでなく、将来においても永久に重要である。彼の天才はその中に、純粹に且つ彼自らの流儀で現れている。彼はまだ誰の影響の下にも立っていない。それはその気高い人の姿を最も忠実に映している。それは彼の言葉によって語られた彼の思想である。……この書物は国民教育の偶石であり、永久に偶石である。但し秘めてある宝はまだ久しく総てが實際的に利用されているわけではない。そしてわたくしたちは教育と教授とに関係しなくてはならない者に対して、幾らその書物に注意を促してもなお足りないくらいである」<sup>(12)</sup>。

ジルバーは、ペスタロッツチーの社会改革・政治改革について、次のように重要な指摘をしている。

「ペスタロッツチーは、自分の《メトード》の効果に最大の期待をかけた。たしかに知育のメトードには、明らかに道德的ならびに政治的な意味がある。自主的に思考し、行動する人格へと子どもを教育することは、しばしば混乱したかに思われる基礎練習の根底に横たわる目標である。ペスタロッツチーは人間を自立させ、人間の幸・不幸を、人間自身の手の中に委ねる。なぜなら、文化はたしかに個々の人格の陶冶からのみ生まれるからである。あるいは、逆に理解されない知識を多くの人々に注入することは、すべての野蛮行為の原因だからである。ペスタロッツチーが、ヨーロッパの文化の墮落と退廃はこれまでの伝統的學校教育に《直観》が欠如していたことに帰因すると言う。彼はこう主張する。《私たちの今日と将来の市民的・道德的ならびに宗教的な退廃をくい止めることのできる唯一つの手段は、私たちの民衆教育が皮相と欠陥と欺瞞から離れて、《直観》がすべての認識の絶対的な基礎であることを承認することである》と強調している」<sup>(13)</sup>。



ペスタロッチーは、人間のあらゆる精神活動を可能にする中心的な力を、《直観》と呼ぶが、彼の直観は、感覚的な直観ではなく、身体全体（全人的）によって認識する直観を意味している。全人格を通して《何が真実か、真実でないか》を確かめ、明晰な直観によって、社会的・政治的真実を認識しようとした。

その結果として、ペスタロッチーは、この一四の書簡で何よりもまず、貧しい下層階級の子どもたちでも人間として生きるための基礎教育を受けられる庶民教育の解放のために戦ったのである。

ペスタロッチーのみた当時の学校は、子どもが入学すると同時に、彼らを文字の世界に引き込め、それによって《直観なき概念》の世界に導きこみ、学校が終わるまでその中に閉じ込めて置くが、それがペスタロッチーには許すべからざる犯罪だと思われた。そこでの教育は子どもたちにとっては苦心惨憺たる文字の学習から始められ、最後にキリスト教問答書のあの機械的な読み方と無理解な暗唱とが強いられる。それはまさに、わが国の戦前の天皇制国家主義教育体制下における小学校で『教育勅語』を教えたように、ペスタロッチーは、こうした非教育的な学校を呪い批判した。

すでに、考察してきた幾つかの例でもわかるように、西洋教育史上の階級的特権を打破して、教育の門戸を広く民衆一般に、無産階級に開放しようとするまったく近代的なかつまた民主的な精神の逞しい息吹を感じることができると。

## 註

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke, herausgegeben von Artur Buchenau Eduard Spranger Hans Stetbacher. 13. Band, 1932. (181-359)、長田新訳「ゲルトロートはいかにしてその子を教うるか」長田新編『ペスタロッチー全集』第8巻平凡社(1974)、鱈坂

二夫訳「ゲルトルトは如何にしてその子等を教うるか」『世界教育宝典ペスタロッチ(3)』玉川大学出版部(1952)・長尾十三三・福田弘訳「ゲルトルト児童教育法」明治図書(1976)等を参考とした。また、Kate Silber『Pestalozzi - Der Mensch und sein Werk. 1957. 及び』の書の訳書『ペスタロッチー〜人間と事業〜』前原寿訳を参考にした。

- (2) ギルツマン(Salzmänn, Christian Gotthilf. 1744-1811)『ペスタロッチーと同時代を生きた。汎愛派に属する著名な教育実践家であり多くの著作を残している。イェナ大学で神学を修め牧師となり、民衆の惨状に接して、民衆救済の方途として民衆教育の重要性に着眼するようになった。一七七四年にゴータ公エルンスト二世後援を得てシュネッペンタールに自分の学校を創設して、生涯を自己の教育理念に基づく教育実践に精力的に取り組んだ。ギルツマンのめざす教育目的は「健康で壮快で理性的で善良な人間を形成すること」であった。教育実践家として著名であったばかりか、教育著作家としても名声を博していた。代表的著作として『蟹の小本〜不合理な児童教育法』(1780)『コンラート・キーファー〜合理的な児童教育法』(1796)『蟻の小本〜合理的な教育者教育法』(1806)など有名である。研究書として「C. G. SALZMANN-BIBLIOGRAPHIE」Unter Berücksichtigung von Besitznachweisen in Bibliotheken, herausgegeben von Wolfgang Frauch und Reinhard Röder. (1981). 拙論『わが国におけるギルツマンの教育思想の受容』流通経済大学論集 vol. 18-4. (1984)

- (3) ケター・シルバー(Käte Silber. 1902-1979)は、第二次世界大戦後におけるペスタロッチー研究の新しい世界を拓いた代表者の一人として高く評価されているので、ここで彼女の苦難に満ちた生涯について述べておきたい。彼女は、東部ドイツに生まれポーランドのポーゼンでギムナージウムを終えた後、一九二七年から三一年までベルリン大学でドイツ文学・歴史ならびに哲学を専攻し、シュブランガー(E. Spangler)のもとで一九三二年、『アンナ・ペスタロッチー』シュルテスとペスタロッチーをめぐる婦人たち』(Anna Pestalozzi-Schultheß und der Frauenkreis und Pestalozzi 1932)という論文で、哲学博士の学位を取得した。一九三〇年代におけるナチスの台頭は、この俊才の運命を大きく左右した。ユダヤ系なるがゆえに市民権を剥奪され、一切の公職から閉め出されたが、当時の逼迫した状況のなかで数年間、恩師シュブランガー教授の助手として物質的・精神的に支えられペスタロッチー研究に専念できたことは、彼女の生涯において忘れ難い思いとなっていた。その後一九三〇年代のおわりまで、ベルリンの『ペスタロッチー＝フレールベル館』で幼稚園ならびに小学校低学年の為の教師の養成に尽力した。さらに、ささやかなユダヤ人学校の教師として、子どもたちの教育に携わった。しかし、一九三九年七月、非人道的なナチスの弾圧政策とユダヤ人迫害に身の危険を感じ、スコットランドのエディンバラに亡命した。

その間ドイツでは一家離散し、彼女の身内はすべてナチスのために殺害された。

一九四四年にエディンバラ大学のドイツ語の非常勤講師ならびに同市の師範学校の代用教員としての職を見いだすまで、彼女

- は異国での知り合いのない孤独な貧しい歳月を家政婦となつて過ごした。一九七六年三月、エディバハラ大学を辞するまで三〇余年間、同大学のドイツ語の講師ではあったが、それは決して彼女にふさわしい職種ではなく、正式な大学講師の称号も与えられてはいなかったようである。むしろ彼女の半生は、もっぱらペスタロッチーの研究に捧げられたと云つてよい。学位論文のほかに、『ペスタロッチーの理想の女性、ゲルトロート』（1933年）、主著『ペスタロッチー・人と事業』（1937年）など多数の執筆活動、とりわけ、『ペスタロッチー著作全集』（校訂版）第二六・二七巻の共同編集者としての業績は、特筆に値する。このことからもうかがえるように、その教奇な生涯にとってペスタロッチーはジルバーの心の支えであり、導きの星であつたのではなからうか。
- (4) Kete Silber: "Pestalozzi. Der Mensch und sein Werk" (1939) s. 126.
- (5) ペスタロッチー・ハウス (Pestalozzihaus) 〒ブルタドルフの町⑥ Kornhausgasse 7, Burgdorf BE. に現在も存。
- (6) Kete Silber: ditto, ss. 126-7.
- (7) Pestalozzi Sämtliche Werke. 13. Band. Schriften aus der Zeit von 1799-1801. bearbeitet von Herbert Schönebaum. Kurt Schreiner. 1932. ss. 272-3.
- (8) Edard Spranger: "Pestalozzis Denkformen" (1961) s. 35. なお、吉本均教授の翻訳『ペスタロッチー研究・教育の思考形式』（明治書院1962）の「日本語版への序文」の中で、シュプランガーはこの書の意義を次のように述べている。「ペスタロッチーは、彼の時代にも、後世にも、ほかの多くのてんで、重要な貢献は、まことに、彼が真の国民学校の思想を把握したといふこと、つまり、単に特権階級に対してではなく民衆のすべての子どもたちに対して平等に定められた学校という思想、そしてすべての子どもを、単に彼らの生計維持や社会の単なる自己保存のためではなく、完全に発達した人間にまで教育する学校という思想を把握した点に在ると言えよう。」
- (9) Pestalozzi Sämtliche Werke. 13. Band. Schriften aus der Zeit von 1799-1801. bearbeitet von Herbert Schönebaum Kurt Schreiner (1932). s. 183.
- (10) ditto, s. 184.
- (11) 現在のブルタドルフ歴史博物館 (Schlossmuseum Burgdorf) の開館時間は、四月から一月までは、日曜日を除いて、14:00～17:00時、日曜日は、11:00～17:00時、一月から三月までは、日曜だけ11:00～17:00まで開館している。
- (12) "Wesen und Zweck der Methode" (1802) の論文は、ペスタロッチーの生存中には印刷されなかった。この論文は「ゲルトロートは、かくにしてその子を教ふるか」の縮図版と云つてもよい。彼がその著作において追求した認識・技能および宗教教育、

道徳教育はこの論文において、内容的にも形式的にも実によく洗練され、極めて整然と定式化去れている。従って、この論文は、スタロッチーのメトードの本質的なもののよき展望を与えるものであると言える。この論文は、『Pestalozzi Sämtliche Werke』14. Band. Schriften aus der Zeit von 1801-1803. bearbeitet von Emanuel Dejung, Walter Feilichfeld, Fales Walter Klausner, Alfred Ruffer, Herbert Schönebaum, 1952. 所収第一四論文。Denkschrift an die Pariser Freunde über "Wesen und Zweck der Methode". Dezember 1802.

- (13) Pestalozzi Sämtliche Werke". 13. Band. ditto, s. 183.
- (14) ditto, s. 183.
- (15) ditto, s. 184.
- (16) ditto, s. 184.
- (17) ditto, s. 202.
- (18) ditto, ss. 202-203.
- (19) ditto, ss. 205-209.
- (20) ditto, s. 211.
- (21) ditto, s. 221.
- (22) ditto, ss. 221-222.
- (23) ditto, s. 223.
- (24) ditto, ss. 224-225.
- (25) ditto, s. 225.
- (26) ditto, s. 226.
- (27) ditto, s. 227.
- (28) ditto, s. 230.
- (29) ditto, ss. 231-232.
- (30) ditto, s. 233.
- (31) ditto, s. 233.
- (32) ditto, s. 235.

- (33) ditto, s. 237.
- (34) ditto, s. 238.
- (35) ditto, s. 239.
- (36) ditto, s. 240.
- (37) ヨハ・ガム (Roger de guimps) "Histoire de J. H. Pestalozzi, sa vie et sa pensee, (1874) 新堀通世訳『ペスタロッチ伝—その生涯と思想—』学芸図書 (1955) 257頁.
- (38) Pestalozzi Sämtliche Werke, 13. Band, s. 240.
- (39) ditto, s. 241.
- (40) ditto, s. 241.
- (41) ditto, s. 242.
- (42) ditto, s. 242.
- (43) ditto, s. 243.
- (44) ditto, s. 244.
- (45) ditto, s. 247.
- (46) ditto, s. 248.
- (47) ditto, s. 248.
- (48) Pestalozzi Sämtliche Werke, 13. Band, Schriften aus der Zeit von 1799–1801, bearbeitet von Herbert Schönebaum Kurt Schreiner. "Die Methode, Eine Denkschrift. Pestalozzi's. 27. Juni 1800.」の『メトード』は、ブルタドルフの小学校におけるペスタロッチの成功を心から喜んだ彼の協力者シユタツプアーは、ペスタロッチのとかく軽視されがちな教育思想を広げるために、一八〇〇年の一月「教育協会」を作った。この協会の求めに応じてペスタロッチが自ら説明書を作ったのがこの『メトード』(Methode)である。ペスタロッチの『メトード』は狭く教育の方法のみを意味するものではない。そうではなくて人間教育の全体を捉えて彼は「方法」と呼んでいる。この『メトード』はペスタロッチの教育論の最初の組織的理論的叙述として重要な位置を占めている。そうした意味から、この『メトード』は彼の教育論の序曲と言える。
- (49) Pestalozzi Sämtliche Werke, 13. Band, Schriften aus der Zeit von 1799–1801, bearbeitet von Herbert Schönebaum, Kurt Schreiner, s. 249.

- (50) Käte Silber. s. 129, 参照: ジルバーは『直観: Anschauung』を次のように説明している。『直観』はベスタロッチーのすべての概念のうちでもっとも難解なものである。なぜなら、この概念はきわめて多義であり、しかもそのなかには彼の人生観の二つの側面が交錯しているからである。一つは、コメニュウスや汎愛主義者たちのように、「感覚的直観」で使っている場合と、彼は、ただ目によるだけではなく五官による事物の把握と考えている。受動的ではなく、能動的な力として捉えている。
- (51) ditto, ss. 250-251.
- (52) ditto, s. 252.
- (53) ditto, s. 252.
- (54) ditto, s. 253.
- (55) ditto, s. 254. ベスタロッチーがここで言う『悟性: Verstand』は、Kantの言うように感性に与えられたものを認識へと構成する能力で理性と感性の中間にあり、科学的思考の主体として明晰』な思考へと導くものとして捉えている。
- (56) ditto, s. 254.
- (57) ditto, s. 255.
- (58) ditto, s. 256.
- (59) ditto, s. 257.
- (60) ditto, s. 257.
- (61) ditto, s. 258.
- (62) ditto, s. 260.
- (63) ditto, s. 265.
- (64) ditto, s. 266.
- (65) ditto, s. 281.
- (66) ditto, s. 297.
- (67) ditto, s. 298.
- (68) ditto, s. 298.
- (69) ditto, s. 299.
- (70) ditto, s. 304.

- (71) ditto, s. 305.  
 (72) ditto, s. 305.  
 (73) ditto, s. 306.  
 (74) ditto, s. 308.  
 (75) ditto, s. 308.  
 (76) ditto, s. 308.  
 (77) ditto, s. 309.  
 (78) 読み・書き・算の三つの能力は、産業構造の急激な変化の中で素朴なスイスの農村地帯まで商品経済が浸透し、農村分解が急速に進行して行くなかで、貧しい農民の子どもたちは、読み・書き・算とい基礎能力を身につけることが焦眉の課題であった  
 (79) ditto, s. 310.  
 (80) ditto, s. 322°.  
 (81) ゼッ・ガム (Roger de Guimps, 1812-1894) "Histoire de K. H. Pestalozzi, sa vie et sa pensee", 1874). 新堀通也訳『ピスタロン・チネーネの生涯と思想』学芸図書、一九五七。二八七頁。  
 (82) ditto, ss. 310-311.  
 (83) ditto, s. 311.  
 (84) ditto, s. 321.  
 (85) ditto, s. 322.  
 (86) ditto, s. 322.  
 (87) ditto, s. 322.  
 (88) ditto, s. 323-4.  
 (89) ditto, s. 327.  
 (90) ditto, s. 328.  
 (91) ditto, s. 329.  
 (92) ditto, s. 334.  
 (93) ditto, s. 334.

- (94) ditto, s. 334  
(95) ditto, s. 335  
(96) ditto, s. 335  
(97) ditto, s. 336  
(98) ditto, s. 337  
(99) ditto, s. 338  
(100) ditto, s. 339  
(101) ditto, 340  
(102) ペスタロッチーは、人間的感性の豊かさをどのように育てるか大きな課題としながらも、この論究は、第一二の書簡では途中で終わっている。別な機会とは、『体育論』(1807年)の中で論究している。
- (103) ditto, s. 341.  
(104) ditto, s. 341.  
(105) ditto, s. 341.  
(106) ditto, s. 342.  
(107) ditto, s. 342.  
(108) ditto, s. 342.  
(109) ditto, ss. 343-4.  
(110) ditto, s. 344.  
(111) ditto, s. 349.  
(112) ditto, s. 349.  
(113) ditto, s. 350.  
(114) ditto, s. 351.  
(115) ditto, s. 352.  
(116) ditto, s. 353.  
(117) ditto, s. 354.



- (11) ditto, ss. 354-5.
- (11) Käte Silber, Pestalozzi, Der Mensch und sein Werk. (1975) s. 138.
- (20) Johann Heinrich Pestalozzi, Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe. (1926) 13. Band. s. 355
- (21) ditto, ss. 355-6.
- (22) Roger de Guimps, "Histoire de J. H. Pestalozzi, sa vie et sa pensee. (1874) 新堀通也訳『ペスタロッチー伝—その生涯と思想—』  
学芸図書 (1955). 282-3頁。
- (23) Käte Silber, Pestalozzi, Der Mensch und sein, Werk. (1975) s. 133-4.

(以上)

